

四 柳 白 山 下 遺 跡 IV

— 県営ほ場整備事業（経営体育成型）四柳地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2008.3

石川県羽咋市教育委員会

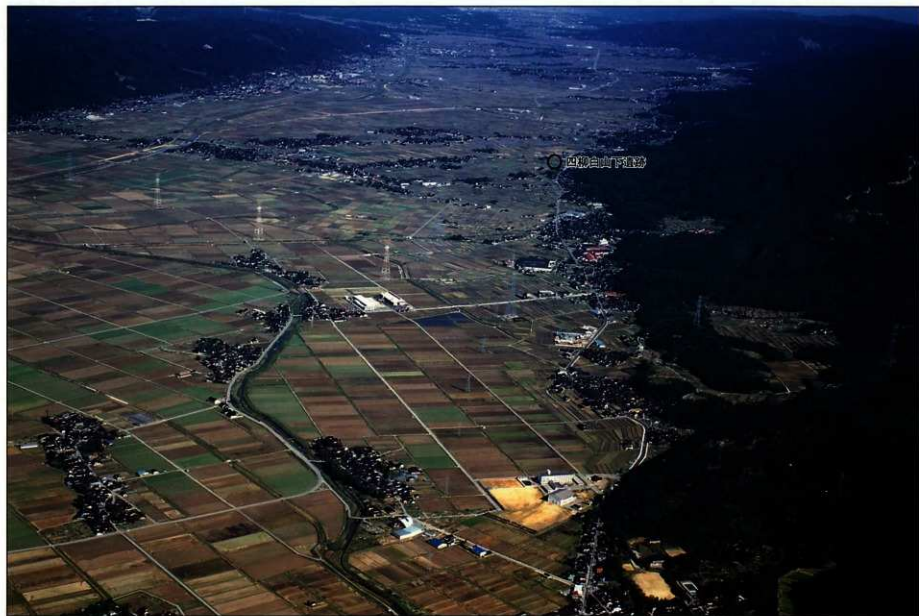
四柳白山下遺跡Ⅳ

—県営ほ場整備事業（経営体育成型）四柳地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

2008.3

石川県羽咋市教育委員会

邑知地帯帯河概



例 言

1. 本書は平成 19 年度に実施した県営ほ場整備事業(経営体育成型)四柳地区にかかる四柳白山下遺跡発掘調査報告書である。調査地は石川県羽咋市四柳町地内に所在する。
2. 調査は、石川県農林水産部農業基盤課、石川県中能登農林総合事務所から委託を受け、羽咋市教育委員会が実施した。費用は同課が負担したほか、一部羽咋市による。
3. 現地調査は羽咋市教育委員会文化財課長谷内碩央の指導のもと、同課主任牧山直樹、同課嘱託宮下栄仁が担当した。また、庶務は同課総括主幹今井淳一、同課主任山岸孝司があたった。
4. 現地調査は平成 19 年 5 月 7 日～平成 19 年 8 月 2 日の期間において実施した。
5. 出土遺物の整理及び報告書作成に必要な記録資料の整理は、牧山の指導のもと株式会社太陽測地社に委託に行った。
6. 本書の執筆、編集は牧山が行い、宮下が補佐した。
7. 本書の遺構・遺物の指示は次のとおりである。
 - (1) 方位はすべて磁北を示している。
 - (2) 高さは海拔高を基準とした。
 - (3) 挿図の縮尺は図内に表示した。
 - (4) 写真図版中の遺物番号は挿図番号と一致する。
 - (5) 遺構には下記の分類番号をつけた。
SK:土坑 SD:溝 Pit:小穴
8. 発掘調査、遺物整理作業及び報告書作成にあたっては、下記の機関と個人からご協力、ご教示を賜った。記して謝意を表したい。(敬称略・順不同)
石川県農林水産部、石川県中能登農林総合事務所、石川県教育委員会、(財)石川県埋蔵文化財センター、四柳町会、シルバー人材センター
9. 本調査の出土遺物と諸記録は、羽咋市教育委員会文化財課において保管・管理している。

目 次

カラー図版	
例言	I 頁
目次、挿図・表目次	II 頁
第1章 位置と自然環境	
1. 地理的環境	1 頁
2. 歴史的環境	4 頁
第2章 調査の経緯と経過	
1. 調査の経緯	5 頁
2. 調査経過	6 頁
第3章 遺構と遺物	
1. 調査の概要	9 頁
2. 第Ⅰ地区	9 頁
3. 第Ⅱ地区	14 頁
4. 第Ⅲ地区	24 頁
第4章 まとめ	28 頁
観察表	29 頁
写真図版	33 頁
抄録	45 頁

挿図・表目次

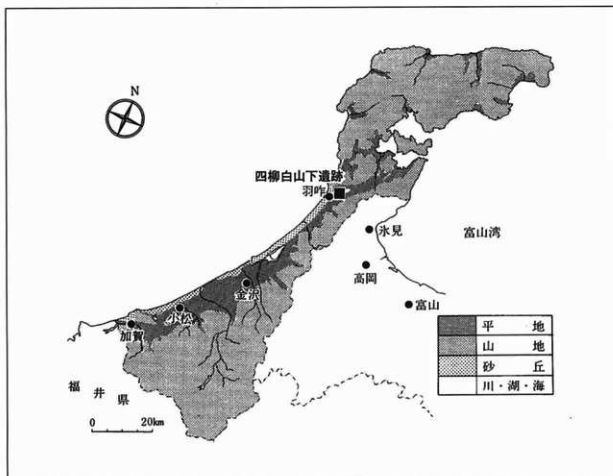
第1図 位置と地形概念図	第11図 第Ⅱ地区7～8区 平面図・遺構断面図
第2図 四柳白山下遺跡と周辺の遺跡分布図	第12図 SK501 出土土器実測図1
第3図 調査区位置図	第13図 SK501 平面図
第4図 第Ⅰ地区土層断面図	第14図 SK501 出土土器実測図2
第5図 第Ⅰ地区1・2区平面図 遺構断面図1	第15図 第Ⅱ地区 その他土坑出土土器実測図
第6図 第Ⅰ地区3～6区平面図 遺構断面図2	第16図 第Ⅱ地区 SD出土土器実測図
第7図 第Ⅰ・Ⅲ地区出土土器実測図	第17図 第Ⅰ・Ⅱ地区 出土木製品実測図
第8図 第Ⅱ地区 東側・南側壁面土層図	第18図 第Ⅱ地区 出土遺物実測図
第9図 第Ⅱ地区1～4区 平面図	第19図 第Ⅲ-1地区 土層図, 平面図
第10図 第Ⅱ地区4～7区 平面図	第20図 第Ⅲ-1地区 遺構断面図
	第21図 第Ⅲ-2, 3地区土層図, 平面図
第1表 周辺遺跡地名表	第4表 出土遺物観察表3
第2表 出土遺物観察表1	第5表 出土木製品観察表
第3表 出土遺物観察表2	

第1章 位置と自然環境

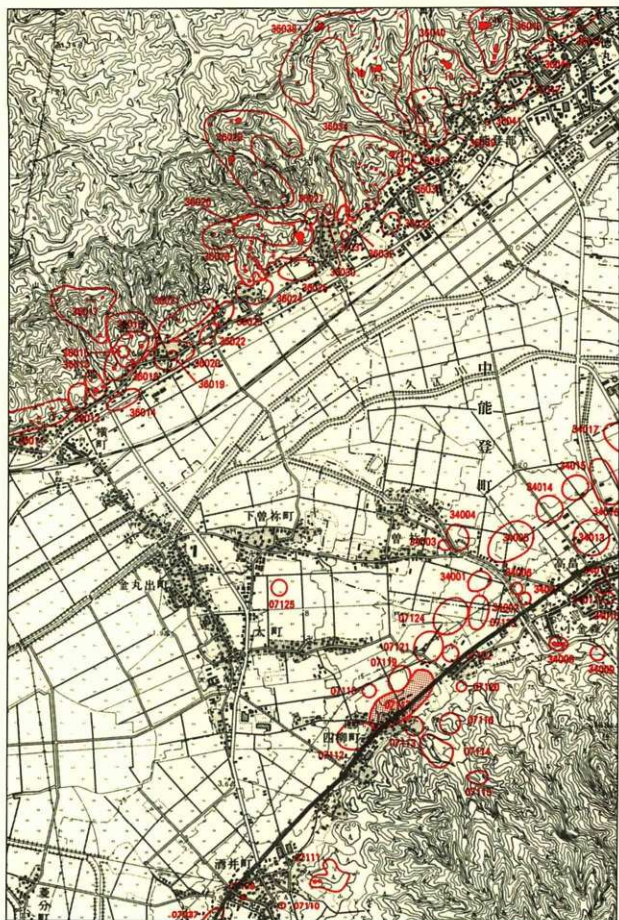
1. 地理的環境

四柳白山下遺跡が所在する石川県羽咋市は、能登半島の基部西側に位置し、西北部に標高 50 ～ 120 m の低平な眉丈山丘陵が北東部に伸び、南東部には本市内の最高峰である標高 461 m の碁石ヶ峰を有する石動山丘陵が連なる。これらの丘陵にはさまれるように七尾から羽咋に至る幅 3 ～ 4 km で能登半島中央部を斜めに横断するいわゆる邑知地溝帯は、半島屈指の穀倉地帯である。また、冬鳥とくに白鳥の飛来で知られる邑知潟は典型的な海跡湖であり、干拓以前は石川県下で河北潟に次ぐ湖沼であった。現在は長曾川と羽咋川を結ぶ水路としての広がりしか残っておらず、その面積は 86ha にすぎない。

一方、日本海に面する西側では、かほく市高松町の大海川から本市一ノ宮に至る延長 12km、幅 1 km をこえる羽咋砂丘（海岸砂丘）が発達している。この砂丘の形成は、内陸側から順に縄文時代前期に形成された内列砂丘、同中期初めに形成された中列砂丘、そして弥生時代末から古墳時代初頭に形成された外列砂丘の 3 列に区分することができる。これらの砂丘で形成される海岸線も最近では侵食が著しく見られる。このため一ノ宮海岸ではテトラポット等の波消しブロックを海中に並べ侵食を防ぐ努力がなされている。



第1図 位置と地形概念図



第1表 周辺遺跡地名表1

遺跡番号	名 称	所在地	所在地通称	種 別	現 状	立 地	時 代	出 土 品	備 考	文 献
07037	酒井田遺跡	羽崎市酒井町		散布地	田	丘陵裾	古墳	高坏 3	道路工事中採集	
07109	酒井古墳	羽崎市酒井町		古墳	宅地	丘陵裾	古墳	須恵器	内堀。横穴式石室。	62
07110	酒井中世墓群	羽崎市酒井町		墓	社地	丘陵裾	中世	五輪塔、板碑		
07111	酒井東古墳群	羽崎市酒井町		古墳	山林	丘陵	古墳		2基以上。	
07112	西郷やち遺跡	羽崎市西郷町		散布地	田	平地	古墳	壺、高坏、甕台	1958年耕地整理時採集	
07113	西郷貝塚	羽崎市西郷町		貝塚	社地・畑・宅地	平地	縄文	土器、石器 1、石簾 3、磨製石斧。		765.768
07114	西郷中の堂遺跡	羽崎市西郷町		散布地	畑	丘陵	縄文・古墳	縄文土器、石器、土師器		765.768
07115	西郷中世墓群	羽崎市西郷町	オハカ	墓	山林	丘陵斜面	中世	板碑、五輪塔、西耳堂 2		
07116	西郷横穴	羽崎市西郷町		横穴墓	山林	丘陵斜面	古墳		7基以上なる。	
07117	西郷白山下遺跡	羽崎市西郷町	白山下	集落跡	田	平地	奈良・平安	土器（胡堂土器を含む）、木器、円面鏡、羽口	1990、91年市教委発掘調査。	1693.1772
07118	西郷宮の蔵古瓦遺跡	羽崎市西郷町	宮の蔵	散布地	田	平地	中世	珠洲焼瓦、宋・明瓦 36 片		
07119	西郷ミツ遺跡	羽崎市西郷町	みつこ	散布地	田	平地	弥生・古墳			
07120	大町横穴	羽崎市大町上野	オハカノ上	横穴墓	山林	丘陵斜面	古墳		2基以上なる。	
07121	大町ダイシツウ遺跡	羽崎市大町	大神宮	散布地	田	平地	中世			
07122	大町なつた遺跡	羽崎市大町	なつた	散布地	田	平地	不詳	長狭壺 1	1975年、耕地整理時採集（詳細地点不明）。	
07123	小金森ヘイナメB遺跡	羽崎市大町 鹿島町小金森		散布地	田	平地	奈良・平安		鹿島町小金森地内にまたがる。	
07124	大町ゴンジウガリ遺跡	羽崎市大町	ゴンジウガリ (五旗堀)	散布地	田	平地	古墳			
07125	大町C遺跡	羽崎市大町		集落跡	田	平地	平安	「大町」墨書土器他	1991年県理文センター発掘調査。	
34001	小金森ヘイナメA遺跡	鹿島町小金森	川久保	散布地	田	平地	縄文			
34002	小金森ヘイナメB遺跡	鹿島町小金森 羽崎市大町	ヘイナメ	散布地	田	平地	奈良・平安			
34003	曾谷大坪遺跡	鹿島町曾谷	大坪	散布地	田	平地	弥生	土器	1961年、耕地整理により発見。旧「曾谷遺跡(A)」を改称。	
34004	曾谷堂田遺跡	鹿島町曾谷	道田の池	散布地	田	平地	弥生	壺、高坏、土器	1959年、耕地整理により発見。旧「曾谷弥生遺跡」を改称。	
34005	曾谷C遺跡	鹿島町曾谷		集落跡	田	平地	古墳	須恵器、土師器		
34006	小金森仏取遺跡	鹿島町小金森		散布地	田	白地末端	鎌倉	鏡	耕地整理により出土。	
34007	小金森宮田遺跡	鹿島町小金森	宮田	散布地	田	平地	古墳	平瓶、甕	耕地整理により発見。旧「曾谷遺跡(B)」を改称。	
34008	曾谷1号墳	鹿島町曾谷		古墳	宅地	白地端	古墳	双龍文障頭大刀、耳環、鉄斧、須恵器（坏蓋、台付長頸壺、甕、壺）	内堀。横穴式石室。1908年、山下家新築により発見。増丘削平。	48.499.511 1177
	曾谷2号墳	鹿島町曾谷		古墳	宅地	白地端	古墳		内堀（径約7m 0.5m）横穴式石室。	
	曾谷3号墳	鹿島町曾谷		古墳	宅地	白地端	古墳		内堀（径約5m 1.5m）周辺が削平され、原形より小形化。	
34009	高島ケツツ遺跡	鹿島町高島	ケツツ	散布地	畑	谷頭	縄文	磨製石斧		
34010	高島様塚古墳	鹿島町高島		古墳	宅地	扇頂部	古墳	主頭大刀 2、副頭耳環、須恵器（坏高坏、甕）	内堀（径10m）、横穴式石室。水口家新築の際発見。増丘削平。	48.499. 1177
34011	高島稲荷社跡遺跡	鹿島町高島		散布地	宅地・畑	扇頂部	古墳			
34012	高島弥生遺跡	鹿島町高島	キクセ小路	散布地	宅地	扇頂部	弥生	壺		
34013	高島遺跡	鹿島町高島		散布地	田	扇頂部	古墳	埴、小形丸底用、壺、高坏	1969年、耕地整理により発見。	501.608
34014	高島ケタ・スギヒ遺跡	鹿島町高島・曾谷		集落跡	田	平地	古墳～中世	須恵器、土師器、白磁、青磁、珠洲焼、勾玉	掘立柱建物、型穴状遺構、土坑。1990年県理文保存協会発掘調査。	1769
34015	高島カンジダ遺跡	鹿島町高島		集落跡	田	平地	縄文・弥生・中世	縄文土器、弥生土器、珠洲焼	掘立柱建物、土坑。清1990年県理文保存協会発掘調査。	1769

2. 歴史的環境

羽咋市は前節の地理的環境とも相まって豊かな生産域と交通の要衝として、歴史上で口能登の拠点として位置付けられてきた。特に羽咋砂丘の北端から眉丈山丘陵に広がる海岸段丘一帯に多くの遺跡が分布しており、古代羽咋の中心域であったことが遺跡の性格からも示されている。

時代に沿って概観すると、羽咋市ではまだ旧石器時代の遺跡は確認されておらず、最古のものは気多社僧坊群遺跡で出土した縄文前期前葉の土器群がある。この周辺で縄文時代の遺跡が散見され、落とし穴が発見された柳田シャコデ遺跡や、寺家遺跡がある。また近年、柴垣町須田の砂取り現場から縄文から中世の複合遺跡が発見されている。今後、調査が進めば同時代の遺跡も増加するものと思われる。

弥生時代にはいと、それまで居住に適していなかった邑知洞周辺の微高地に、かなり大規模な集落が営まれるようになる。中でも吉崎・次場遺跡は、遅くとも前期新段階には集落が成立し、以降古墳時代初頭に至るまで中核的集落として営まれていたことが確認されている。また、砂丘地帯でも弥生時代中期から後期の兵庫オクヤマデ遺跡、寺家遺跡、柴垣須田遺跡などが点在する。

古墳時代になると、これまで様相がはっきりとつかめていなかった前半について、太田ニシカワダ遺跡の調査で好資料が得られている。漆工関係土器群など工所的集落としての性格が濃厚であると推察され、吉崎・次場遺跡から継続する集落と見なされている。また、北部においても眉丈山丘陵からのびる尾根上で滝谷八幡社遺跡の調査で10棟以上の住居跡が確認されるなど空白部分が埋められつつある。また、後期以降になると寺家遺跡周辺で集落の営みが確認され、その南端部では6世紀前半に中心部の祭祀活動に先行する様相の集落の存在が明らかとなった。一方、古墳は、北部海岸段丘部に滝大塚古墳に代表される滝古墳群、柴垣古墳群、柳田古墳群などがまとまって造営されている。南部砂丘地においても、羽咋古墳群、新保ゼンボン古墳群が造営されており、東部では志雄周辺の丘陵部に集中している。須恵器生産もすでに該期に始まり、柳田古墳群周辺丘陵の開析谷で県内でも早い時期の5世紀末ごろから8世紀中ごろまで継続的に操業が行われている。

奈良・平安時代以降になると、北部砂丘上に気多神社と深く関係した寺家遺跡やシャコデ廃寺などの活動が活発となり、羽咋地域の中核的状況の様相を強める。また羽咋中央部の吉崎・次場遺跡や長者川遺跡から発見された墨書土器などの出土品から官衙や郡衙との関係が注目される。一方、羽咋市北東部に当たる余喜地区では、四柳白山下遺跡がその活動域の最盛期とよべる時期にあたる。周辺の四柳ミッコ遺跡、大町ダイジングウ遺跡などの調査成果から、墨書土器をはじめ多彩な遺物や遺構が検出され、古代官道沿いの遺跡として注目されている。

中世以降には酒井町の山中に永光寺が建立され、曹洞宗の根本道場として発展している。余喜地区においては、大町ダイジングウ遺跡から、周辺の余喜比古神社に関連すると目される遺構、遺物が確認されるほか、大町ゴンジョガリ遺跡や本遺跡より、呪符木簡が出土している。

参考文献

- 『寺家遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ』1986・1988 石川県立埋蔵文化財センター
- 『吉崎・次場遺跡 第13次発掘調査』1994 石川県羽咋市教育委員会
- 『永光寺遺跡』1999 石川県羽咋市教育委員会
- 『四柳白山下遺跡Ⅰ』1993、『同Ⅱ』1994、『同Ⅲ』1997 石川県羽咋市教育委員会
- 『四柳白山下遺跡Ⅰ・Ⅱ』2005・2006 財団法人石川県埋蔵文化財センター

第2章 調査の経緯と経過

1. 調査の経緯

平成16年度より5カ年の計画で、ほ場整備事業（経営体育成型）四柳地区が実施された。石川県ではそれに先立ち、事業対象区域において分布調査を3カ年に渡って実施しており、その分布調査で、四柳白山下遺跡の広がりが確認された。中能登農林総合事務所（以下；中能登農林）と石川県教育委員会文化財課（以下；県文化財課）の間で、工事設計に関する調整が行われた結果、埋蔵文化財について影響の出る範囲が確定した。

平成16年9月9日付け教文第2528号で通知を受けた「埋蔵文化財発掘調査等に係る県及び市町村の役割分担について」に基づき、中能登農林と県文化財課及び羽咋市教育委員会文化財課（以下；市教委）の3者で協議がなされ、平成19年度に市教委が中能登農林から委託を受ける形で発掘調査を実施することで合意した。発掘調査にかかる費用はその9割を中能登農林側が負担し、1割を当該文化財保護部局である市教委が負担した。後述するが、調査途中で、調査面積の変更があり、それに伴い、契約を変更している。

この地下の埋蔵文化財に影響が及ぶと考えられる範囲は、大きく3箇所に分かれている。それぞれの調査原因は、農道の付け替え工事による場所と、現田面の掘削が遺構に及ぶ場所、及び排水路の設置による掘削が埋蔵文化財に及ぶ場所である。

1 箇所目は、今回の発掘調査の中では一番西側（羽咋市四柳町れ29番地）に位置し、ほ場整備による田面の上昇に伴い、隣接する農道にも盛り土を行わなければならなくなったために、その盛り土の厚さが、遺構面より3m以上になる部分が調査対象区域となった。この幅6m長さ22m、面積132㎡部分を第Ⅰ地区と呼称する。このうちの北端部分に当たる5・6区の6×8＝約48㎡部分が文化財部局負担分であり、その他の箇所はほ場整備担当部局の負担である。

2 箇所目は、今回の調査区域の中では一番東側（四柳町れ63番地1、64番地1）に位置し、現在の田面の切り下げにより、地下の埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲である。幅7m長さ35m面積245㎡の範囲で、そのうちの幅5m長さ35m面積175㎡の部分については事前の試掘調査により、2面分の発掘調査が必要であると計算された。この上層245㎡、下層175㎡、合計420㎡の部分を第Ⅱ地区と呼称する。この第Ⅱ地区については調査が進むにつれ、上層と捉えていた部分が後世の攪乱であると判断したため、調査面積についての計画を当初より縮小し、年度の途中に縮小した面積で契約を変更した。最終的に調査を行ったのは7m×36m＝252㎡である。

3 箇所目は、第Ⅱ地区の西側の農道周辺部分（四柳町れ62番地、農道）である。農道部分に通っている簡易水道の付け替えにかかる掘削が影響する部分1.2m×5m面積6㎡部分と、U字溝の設置に係る掘削が影響する部分2m×25m面積50㎡及び、排水溝の接続部の、ためます設置のための掘削部分面積30㎡合計86㎡の部分を第Ⅲ地区と呼称する。

平成元年の個人住宅建設に伴う発掘調査が契機となって、これまでに市教委で通算3次の発掘調査が実施されており、市教委による調査は今回が第4次ということになる。また、平成6年から平成12年にかけて、一般国道159号鹿島バイパス改築工事が原因となる発掘調査が（財）石川県埋蔵文化財センターにより7次にわたって実施されており、周辺の遺跡も含めて縄文期から近世にわたる四柳町地区周辺の様相が明らかになってきている。

2. 調査の経過（日誌抄）

第Ⅰ地区

- 5月7日 本日より現地入り。第Ⅰ地区について、県文化財課浜崎主幹立会のもと重機による表土除去作業を行う。
- 5月8日 発掘用機材の搬入
- 5月9日 調査補助作業員現地入り。機材の搬入及び、調査区壁面の調整及び排水用溝の掘削作業
- 5月10日 調査区全体の掘り下げ及び遺構検出を行う。
- 5月11日 前日の降雨により調査区が水没。排水作業の後、前日に続き遺構検出作業を実施。検出状況の写真撮影をあわせて実施する。
- 5月14日 湧き水により、調査区の半分近くが水没。排水作業後、全体を清掃し、遺構の半載及び測量用グリッド杭を設置する。
- 5月15日 排水・遺構断面観察・平面図実測作業
- 5月16日 平面実測作業
- 5月17日 排水作業 セクションポイント設置作業
- 5月18日 遺構断面実測・写真撮影
- 5月21日 排水作業・遺構掘り下げ・写真撮影
- 5月22日 排水作業・遺構掘り下げ・写真撮影・平面実測作業
- 5月23日 排水作業・壁断面実測・平面実測・レベル注記・写真撮影
- 5月24日 木製品取り上げ 第Ⅰ地区現地調査終了



第Ⅰ地区遺構検出作業風景

第Ⅱ地区・第Ⅲ地区

- 5月28日 第Ⅲ地区の一部及び第Ⅱ地区途中で重機による掘削作業
- 5月29日 第Ⅱ地区の表土除去作業の続き及び第Ⅲ地区及び第Ⅱ地区の壁面調整及び除草作業
セクション用の杭打ち作業
- 5月30日 第Ⅱ地区全体の掘り下げ、グリッド杭のレベル実測
- 6月1日 1～4区掘り下げ、土層観察用に壁面部に4箇所トレンチ設置
- 6月4日 調査区東側（1～2区）を中心に掘り下げ
- 6月5～7日 1～4区掘り下げ、遺構検出
- 6月8日 4・5区の状況から判断して、包含層と捉えていた層が攪乱層であると判断し、6～8区にかけて、重機により掘り下げる
- 6月11日 5～8区にかけて掘り下げ
- 6月12日 7～8区掘り下げ、一部遺構検出、壁断面清掃、土層観察
- 6月13日 7・8区掘り下げ、全体清掃作業の後遺構検出作業。検出状況撮影
- 6月15日 遺構半載作業
- 6月18日 同上
- 6月19日 4～7区にかけて遺構精査しながら半載作業を行う
- 6月20日 遺構半載の続き 溝状遺構の半載はほぼ終了 試掘データとの整合性確認のため、新たにサブトレンチを設置する。



第Ⅰ地区排水作業風景

6月21日 遺構断面、壁面の土層観察及び写真撮影
 6月22日 降雨、現況の写真撮影
 6月25日 降雨、調査区の半分以上が水没
 6月26日 重機により調査区の一部を崩し、排水路を設ける。
 6月27日 終日排水作業
 6月28日 排水作業、全体清掃。壁面調整及び土層観察
 6月29日 雨天により現地休業降雨の準備
 7月1日 午後から排水作業
 7月2日 排水作業、断面実測用セクションポイント設置
 7月3日 Ⅱ地区の遺構断面図作成及び平面図実測作業
 Ⅲ地区排水作業及び掘り下げ
 7月4日 Ⅱ地区の遺構断面図作成及び平面図実測作業、写真撮影、レベル注記
 Ⅲ地区排水作業及び掘り下げ
 7月5日 Ⅱ地区の平面図実測作業、レベル注記、Ⅲ地区排水作業及び遺構検出
 7月6日 Ⅱ地区排水作業及び遺構断面観察、一部遺構完掘
 Ⅲ地区排水作業及び遺構検出
 7月7日 Ⅱ地区排水作業、平面実測作業
 7月9日 Ⅱ地区排水作業、調査区域内の清掃、遺構掘り下げ完掘
 7月10～11日 降雨のため排水作業
 7月12日 Ⅱ地区排水作業後遺構掘り下げ、5～8区の遺構断面観察及び写真撮影、実測作業
 7月13日 Ⅱ地区排水作業、遺構掘り下げ、

壁面調整、土層観察、写真撮影。平面実測レベル注記

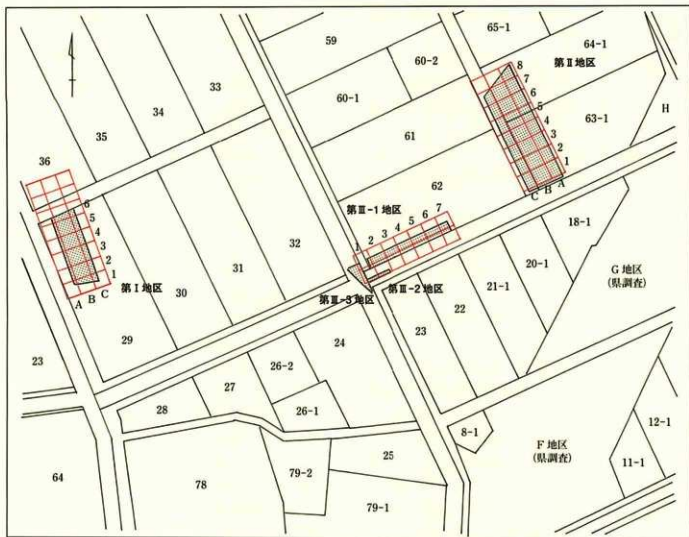
7月16日 主に1～3区の平面実測作業 本日上中越で大地震あり。羽咋で震度3、被害なし。
 7月17日 Ⅱ地区壁断面実測作業
 7月18日 Ⅱ地区排水作業、全体清掃後、遺構完掘し、写真撮影を行う。一部断面実測
 7月19日 Ⅱ地区の写真撮影の続き、Ⅲ地区清掃後、遺構検出、写真撮影
 7月20日 Ⅱ・Ⅲ地区排水、壁断面実測作業
 7月23日 Ⅲ地区の残る農道部分を重機による表土除去作業。午後より、遺構半載作業と掘削箇所の掘り下げ
 7月24日 第Ⅱ地区全体の測量作業。壁断面実測。Ⅲ地区一部セクションポイント設置、遺構断面実測作業
 7月25日 Ⅲ地区平面実測作業、壁断面実測作業。完掘状況写真撮影
 7月26日 Ⅲ地区壁断面及び平面実測作業
 7月27日 Ⅲ地区平面実測作業
 7月30日 Ⅲ地区平面実測作業、Ⅱ地区遺物取り上げ遺構（SK 501）掘り下げ、平面図修正。補助作業員現地調査終了。発掘機材撤収
 7月31日 資材の搬出 Ⅱ地区SK 501 実測図修正、レベル注記
 8月1日 SK501 完掘、写真撮影、遺物取り上げ。実測図の補足作業
 8月2日 実測図補足作業をもって現地での発掘調査作業を終了。



第Ⅱ地区遺構検出作業風景



第Ⅲ地区表土除去風景



第3図 調査区位置図 (1/1,000)



《調査協力者》 今井 秋子、今井 隆奥子、奥本倫子、堅田 忠、小林静美、白田与四郎、曾原隆信、西井廣一、濱田静子、松田みつゑ、松本茂男、山本秀雄、横井正秀

第3章 遺構と遺物

第1節 調査の概要

四柳白山下遺跡は羽咋市東北部の石動山系の麓に位置している。今回の調査区は標高約10～15m程度であり、大きく3箇所に分かれている。調査を行った順番にⅠ・Ⅱ・Ⅲ地区と呼称し、今回の報告もそれぞれに分けたものとする。調査区については4×4mのグリッドを割り付けた。このグリッドは調査区の現況に合わせた任意のものである。第Ⅰ地区については南北方向に南からアラビア数字をふり、東西方向の西からアルファベットを割り振って呼称した。この座標が交差する点の名称を交点の北側のグリッド名とした。第Ⅱ地区についても同様に、南北方向にアラビア数字、東西方向にアルファベットを割り振り、交点の北側のグリッド名とした。第Ⅲ地区については、第Ⅱ地区で用いた1列グリッドを西側に延長し、幅が狭いため、特にアルファベットを割り振ることなくアラビア数字による区分のみとした。第Ⅲ-1地区の西端から順に1区と呼称している。以下に調査地区ごとに遺構と遺物について報告していく。

第2節 第Ⅰ地区（四柳町れ29番地内）

調査時の現況は標高10.7mほどの水田であり今回の調査区の中では一番低い。層序は耕作に伴う土が60cm程度堆積し、その下に遺物を包含した黒褐色粘土層が5cm程度の厚さで堆積している。昭和30年代までに耕地整理が行われており、包含層の残り具合は良くない。この包含層の下の方灰色砂層が遺構検出面である。また、南北方向に長い長方形の調査区域の内、北側に当たる4～6区にかけては黄橙色砂礫層となっており、この砂礫層を掘り込む形で遺構が確認されている。調査区の北西角部では黄橙色砂礫層が削平され、厚さ10cm程度の濁灰色粘土を確認した。

第Ⅰ地区で確認された遺構は溝状遺構が15条、土坑が3基、小穴が62基である。総じて小穴、土坑を切る形で溝が確認されており、この調査区においてはこの溝状遺構が一番新しい遺構となる。

溝状遺構

南北方向、東西方向の2つの向きに大別できる。それぞれ、東西・南北方向を基準として、±5°程度のずれにおさまる。

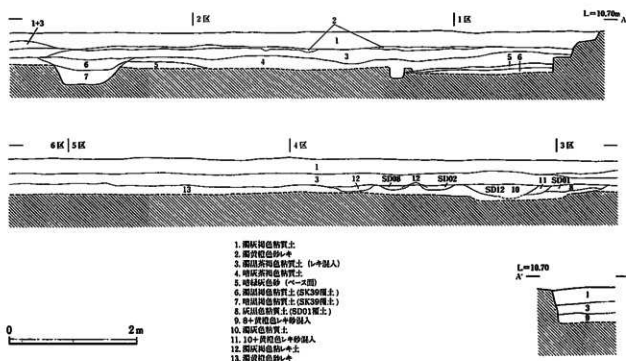
SD01 幅156cm、深さ10cm、N-88°-Eを測る。4区から西に広がる黄橙色砂礫層で確認された。東から西に向かってなだらかに傾斜しており、西端は近代の濁灰色粘土によって切られている。

SD02～SD06

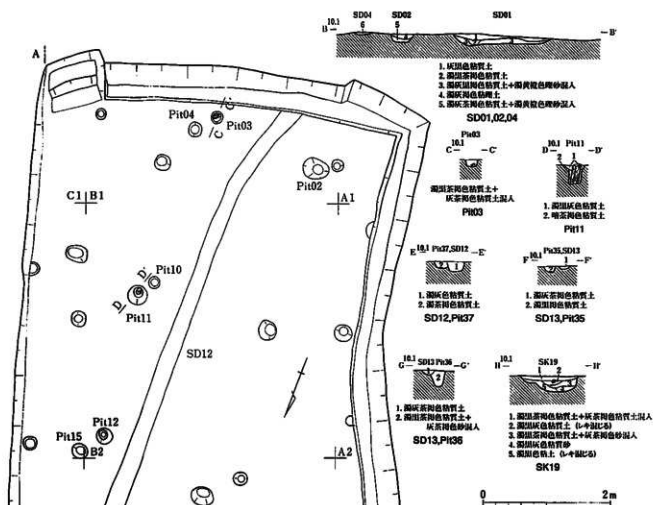
幅20～40cm、深さ5～20cm。ほぼSD01と平行しており、南端部は同じく切られている。傾斜も同様である。溝間の距離は60～200cmとなる。

SD07～SD10

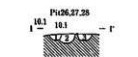
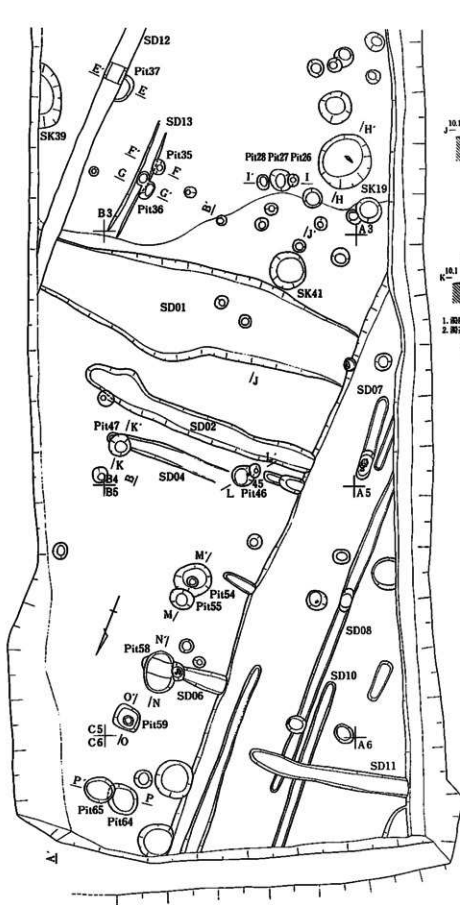
主にA・B4区～6区にかけて、濁灰色粘質土の下から検出された一群である。幅15～30cm、深さ5～15cm、N-1～7°-Wを測る。SD08が一番長いが、その他の溝も掘削により上端を削平されている可能性がある。同じような長さで、若干深さが違う程度であったとすると、畝溝状に並んで伸びていた可能性が考えられる。それぞれの溝間の



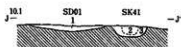
第4图 第1地区土层断面图 (1/60)



第5图 第1地区1·2区平面图 追横断面图1 (1/60)



1. 黄褐色粘质土+灰褐色粘质土
2. 黄褐色粘质土+砂
Pit 26, 27, 28



1. 灰褐色粘质土
2. 黄褐色粘质土 (砂+混入)
3. 黄褐色粘质土 (砂+少)
SD01, SK41



1. 黄褐色粘质土
2. 黄褐色粘质土
Pit 47



1. 黄褐色粘质土
2. 黄褐色粘质土
3. 黄褐色粘质土+灰褐色砂混入
Pit 45, 46



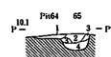
1. 灰褐色粘质土
2. 黄褐色粘质土
Pit 54, 55



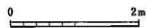
1. 黄褐色粘质土
2. 黄褐色粘质土
3. 黄褐色粘质土 (灰褐色混入)
4. 黄褐色粘质土 (灰褐色+砂混入)
SD06, Pit 58



1. 黄褐色粘质土
2. 黄褐色粘质土 (灰褐色混入)
3. 黄褐色粘质土+黄褐色砂混入
4. 黄褐色粘质土
Pit 59



1. 黄褐色粘质土
2. 黄褐色粘质土
3. 黄褐色粘质土+黄褐色砂混入
4. 黄褐色粘质土
Pit 64, 65



第6图 第1地区3~6区平面图 遗構断面図2 (1/60)

距離は30～80cmである。

- SD11 幅25cm、深さ10cm、N-82°-Eを測る。SD07等と同じく濁灰色粘質土の下で検出された。SD08、10とほぼ直交し、切りあいからSD11の方が新しい。
- SD12 幅30cm、深さ30cm、N-1°-Eを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は濁灰色粘質土である。調査区東壁面下よりの湧水が著しく、近代の暗渠であると判断したため、完掘はしていない。地形的に東から西に傾斜しているものと考えられる。
- SD13 幅15cm、深さ5cm、N-5°-Eを測る。SD12とほぼ並行して走っており、SD01と同じ用途に供されていたと考えている。

土坑状遺構

現地調査時には一括して小穴として捕らえていたもののうち、長径50cmを超える程度の楕円形もしくは円形を呈するものを土坑として報告する。小穴との差異は大きさ程度のみで、用途等で区別したわけではないことを記載しておく。また、現地では小穴と連続して遺構に番号を割り振ったため、今回の報告ではその番号をそのまま用いることとしたい。

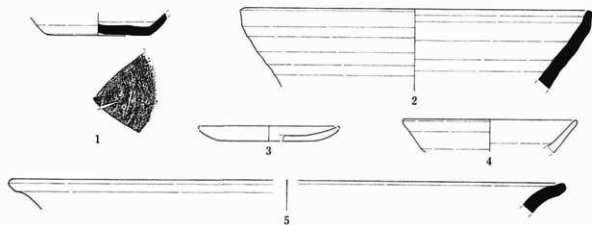
- SK19 A3区 径100cm、深さ25cm。先端のつながった長さ10cmの杭状木製品が出土。出土状況は正位ではなく、横倒しの状態であった。
- SK39 C3区 確認できる部分の長径80cm、深さ40cm。調査区北側の壁面下から検出。須恵器無台坏が出土している。
- SK41 A5区 径60cm、深さ20cm。遺構覆土中に、腐食した木質土層が確認された。土師器皿が出土している。

小 穴

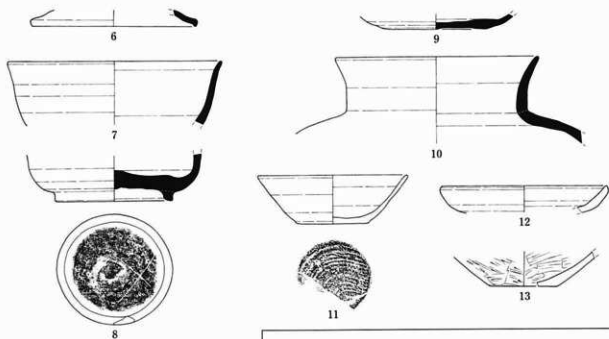
全体的に遺物の入った遺構の少ない現場であったが、小穴についても状況は同じである。現場において遺物の確認されたものを中心に報告する。

- Pit02 A1区 径15cm、深さ20cm。細片のため実測できなかったが、土師器片が出土している。
- Pit03 B1区 径15cm、深さ20cm。先端のつながった杭状木製品出土
- Pit09 A2区 径15cm、深さ15cm。細片のため実測できなかったが、土師器片が出土している。
- Pit11 径40cm、深さ50cm。直径15cmの柱根出土
- Pit20 A3区 径20cm、深さ20cm。土師器が一点出土している。
- Pit22 A4区 径20cm、深さ20cm。細片のため実測できなかったが、土師器片が出土している。
- Pit44 A5区 径30cm、深さ51cm。SD01を切り、調査区南西角の濁灰色粘土に切られている。木製品が出土している
- Pit51 B5区 径30cm、深さ20cm。須恵器甕口縁部片が出土している。
- Pit54 B5区 2段に掘られている。上段の径45cm、深さ5cm、下段の径20cm、深さ15cm。細片のため実測できなかったが、土師器片が出土している。
- Pit58 B5区 径20cm、深さ10cm。SD06に切られている。木製品が出土している
- Pit59 B5区 2段に掘られている。上段の径45cm、深さ5cm、下段の径15cm、深さ10cm。細片のため実測できなかったが、土師器片が出土している。

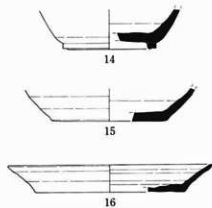
現地調査において、掘建柱建物とは認識しなかったが、柱根の残る Pit11 を中心に南北方向に確認



第 I 地区道槽出土分

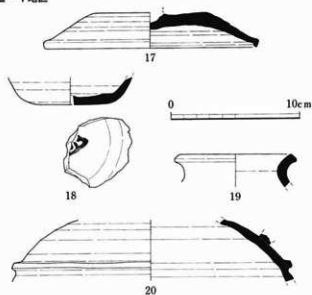


第 I 地区 包含層



第Ⅱ-2地区

第Ⅱ-1地区



第7图 第 I・Ⅲ地区出土土器実測図 (1/3)

した Pit04 と Pit12、またその西側で確認した Pit03、10、21、また SD11 を挟んで西側に確認した Pit02、09、34 がそれぞれ直線に並んでおり、それぞれの間隔は 2.65 ～ 2.7 m を測る。建物もしくは柵列である可能性が考えられる。また、B 4 ～ 5 区において確認した 2 段掘りの Pit54、59 については、こちらは対応する列が確認できなかったため、建物としての認識がなかったが、調査区北西角の濁灰色粘土による整地が行われた折に削平されてしまっているとすれば掘立柱建物であった可能性も考えられる。またこの 2 基を結んだ延長上には、いくつかの小穴が存在しているが、2 段に掘られているものは確認できなかった。この 2 基の間隔は 2.4 m を測る。またそれぞれの方向は 1・2 区で確認された列が N-1 ～ 2°-W、5・6 区で確認された列が N-3°-E をなしている。

出土遺物

遺物の出土量は少なく、パンケース換算で 1 箱程度である。細片が多く、できるかぎり実測を行ったが、図化できた土器資料は 13 点である。溝から出土したものが 1 点、土坑、小穴から出土したものが 4 点、包含層等その他出土が 8 点となった。図化資料については 8 世紀以降の須恵器が 8 点、土師器が 5 点の内訳で、土師器には No.3 などのようにやや新しいものも含まれる。

第 3 節 第 II 地区（四柳町 63 番地 1、64 番地 1 地内）

基本的な層序については、現水田耕作面が 20cm 程度堆積し、その下に灰色粘土層が 20cm 程度堆積している。第 I 地区に見られなかった濁黒褐色粘質土がその下に 10cm 程度の厚さで堆積している。第 I 地区同様昭和 30 年代までに耕地整理を行ったとのことで、後から搬入された土砂と中世の包含層が全体的に混同しているものと思われる。この層中において、珠洲焼や陶磁器片を中心とした遺物が散見された。第 I 地区においてベース面と判断した青灰色砂層は調査区の東側では浅い段階で確認でき、調査区西側に向かって傾斜していつている。包含層の残り具合は良くない。1、2 区において、橙褐色砂礫が確認でき、耕作に伴うものか、自然流入したものか判断が困難であった。また、2 ～ 8 区にかけて、幅 3 m 程度で、黄褐色砂レキが南東から北西方向に向かって確認でき、自然地形の水路であった可能性がある。

第 II 地区で確認された遺構は溝状遺構が 39 条、土坑が 7 基、小穴が 11 基である。以下に全体的な傾向及び遺物を伴うものを中心に記載していく。

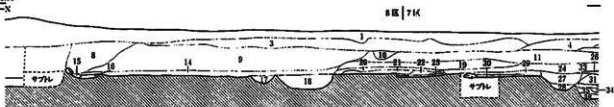
溝状遺構

溝状遺構については、東西方向と南北方向の異なる 3 方向に分けられる傾向がある。調査区南側部分に当たる 1 ～ 5 区において検出されたものは、細めで、浅い傾向にあり、中央部から北側に当たる 6 ～ 8 区で検出されたものは比較的しっかり残り、間隔もしつかりあっている傾向にある。

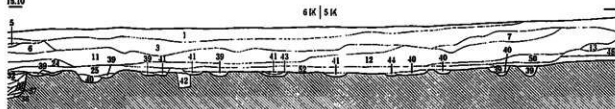
SD01 ～ 07

幅 10 ～ 30cm、深さ 5 ～ 30cm、N-15 ～ 28°-E を測る。調査区南東角部の高まりと並行する形で検出されている。SD03 内からは径 5cm 程度の杭が並んで検出され、SD05 からは竹筒による排水施設が確認された。これらは近代の耕作に伴う溝であると判断している。

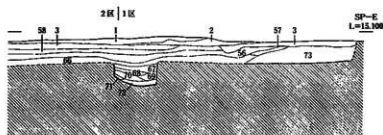
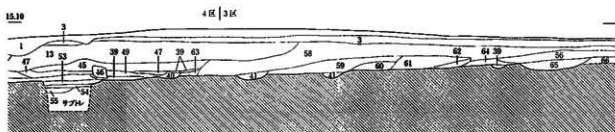
L=15.10
SP-N



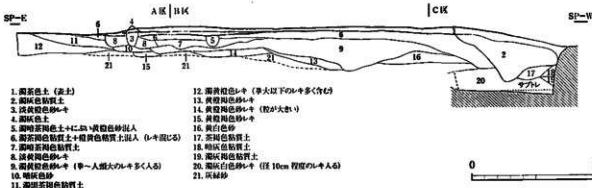
15.10



15.10

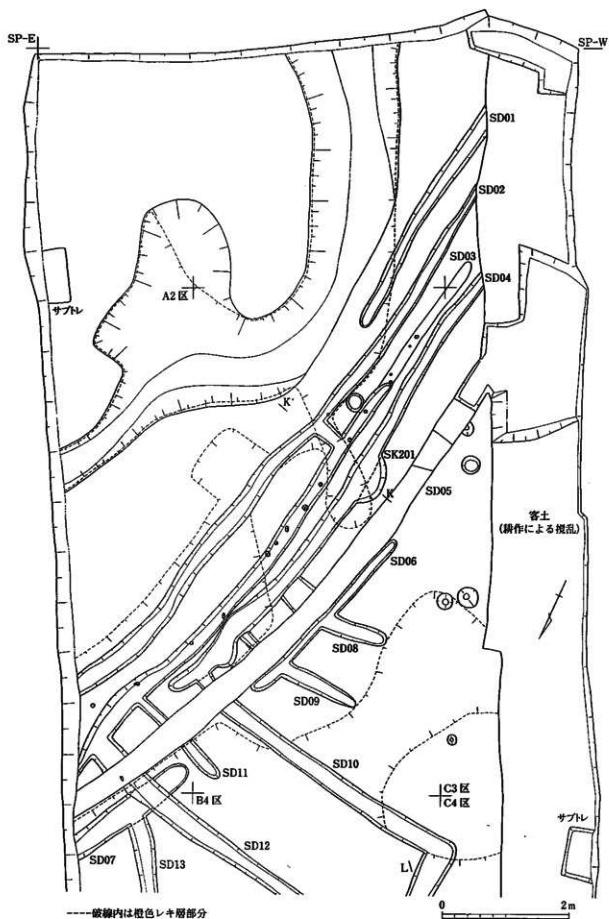


- | | | |
|---|---------------------------|----------------------|
| 1. 黄褐色粘質土 | 16. 灰黄色粘質土+灰褐色砂混合 | 31. 黄褐色粘質土 |
| 2. 黄褐色粘質土 | 17. 暗灰色粘質土+黄褐色砂+黄褐色砂+黄褐色砂 | 32. 黄褐色粘質土+黄褐色砂+黄褐色砂 |
| 3. 黄褐色粘質土 (細砂土) | 18. 暗灰色粘質土 | 33. 暗灰色粘質土 |
| 4. 黄褐色粘質土+黄褐色砂混合 | 19. 黄褐色粘質土 | 34. 黄褐色砂 |
| 5. 黄褐色砂 | 20. 黄褐色粘質土 | 35. 黄褐色粘質土+黄褐色砂+黄褐色砂 |
| 6. 黄褐色粘質土 (砂土) | 21. 黄褐色粘質土 | 36. 黄褐色粘質土 |
| 7. 黄褐色粘質土 | 22. 黄褐色粘質土 | 37. 黄褐色粘質土 |
| 8. 黄褐色粘質土 (砂土) | 23. 黄褐色粘質土 | 38. 黄褐色粘質土+黄褐色砂 |
| 9. 灰白色砂+灰褐色粘質土 (砂大のレキ多く含む) | 24. 黄褐色粘質土 | 39. 黄褐色粘質土 |
| 10. 黄褐色粘質土 | 25. 黄褐色粘質土 | 40. 黄褐色粘質土 |
| 11. 黄褐色粘質土+黄褐色粘質土+黄褐色粘質土+黄褐色粘質土 (砂大のレキ多く含む) | 26. 黄褐色粘質土 | 41. 黄褐色粘質土 |
| 12. 黄褐色粘質土 | 27. 黄褐色粘質土 | 42. 黄褐色粘質土 |
| 13. 黄褐色粘質土+黄褐色粘質土 | 28. 黄褐色粘質土 | 43. 灰白色砂 |
| 14. 黄褐色粘質土 | 29. 黄褐色粘質土 | 44. 黄褐色粘質土+黄褐色砂+黄褐色砂 |
| 15. 黄褐色粘質土 | 30. 黄褐色粘質土 | 45. 黄褐色粘質土+黄褐色砂+黄褐色砂 |

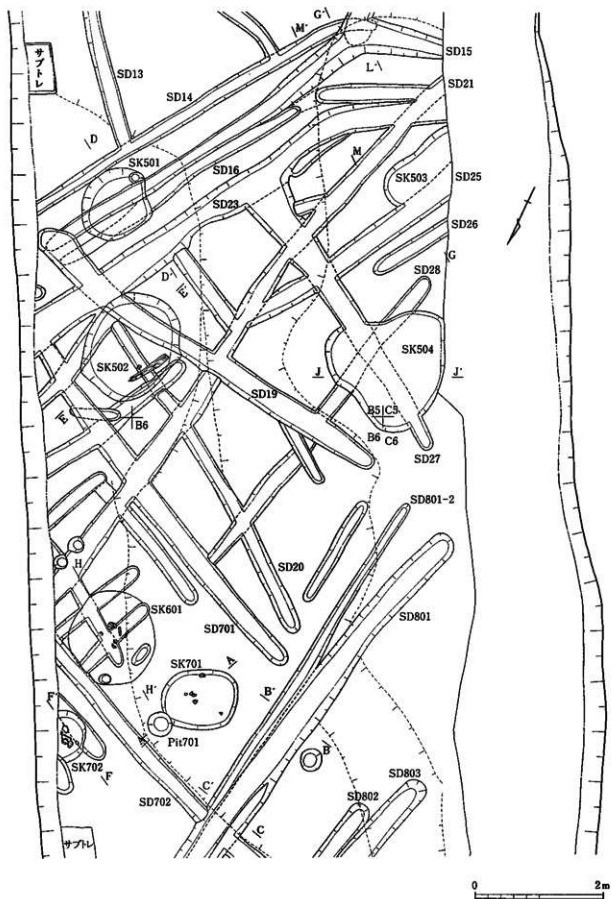


- | | |
|-------------------------------------|----------------------------|
| 1. 黄褐色土 (表土) | 12. 黄褐色粘質土 (砂大以下のレキ多く含む) |
| 2. 黄褐色粘質土 | 13. 黄褐色粘質土 |
| 3. 灰白色砂+黄褐色砂 | 14. 黄褐色粘質土 (砂が大) |
| 4. 黄褐色粘質土 | 15. 黄褐色粘質土 |
| 5. 黄褐色粘質土+黄褐色粘質土+黄褐色粘質土 (砂大のレキ多く含む) | 16. 黄褐色砂 |
| 6. 黄褐色粘質土+黄褐色粘質土+黄褐色粘質土 (砂大のレキ多く含む) | 17. 黄褐色粘質土 |
| 7. 黄褐色粘質土 | 18. 黄褐色粘質土 |
| 8. 黄褐色粘質土 | 19. 黄褐色粘質土 |
| 9. 黄褐色粘質土 | 20. 黄褐色粘質土 (厚 10cm 程度のレキ大) |
| 10. 黄褐色砂 | 21. 黄褐色砂 |

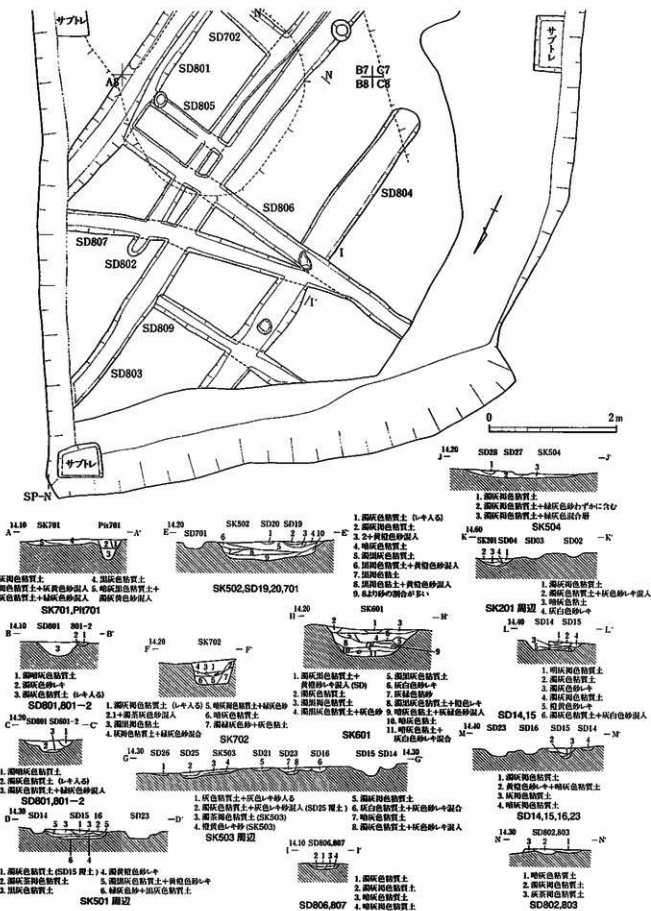
第8図 第II地区 東側・南側断面土層図 (1/60)



第9図 第Ⅱ地区1～4区 平面図 (1/60)



第10図 第Ⅱ地区4～7区 平面図 (1/60)



第11図 第II地区7～8区 平面図・遺構断面図 (1/60)

SD08～12

幅20～30cm、深さ10～30cm、N-73～78°-Wを測る。溝間の距離は90cm前後である。
SD10は西端で南北方向に曲がっており、須恵器片などが出土している。

SD14～16、23

幅15～40cm、深さ10～30cm、N-31～35°-Eを測る。SD10と同様に南西端で曲がっている。ほぼ並行して走っており、溝間の距離は60～90cmを測る。SK501より新しい遺構である。

SD17、18、20 幅15～30cm、深さ5～30cm、N-55～65°-Wを測る。

SD19、21

幅15～30cm、深さ5～30cm、この4～6区にかけて検出された溝の内この2本についてはほかの溝と違い、主軸が東西、南北からそれぞれ10°前後のずれとなっている。どちらかというところ7～8区にかけて検出された一群と同じ軸をしている。切りあいからSD19のほうが新しい。

SD701、702 幅20～30cm、深さ10～20cm、N-63～68°-Wを測る。土師器片が出土している。

SD801～804

幅20～40cm、深さ10～30cm、N-10～12°-Eを測る。溝間の距離は約1.8mである。
SD802、803、804から土師器片が出土している。切りあいから803より802の方が新しい。

SD805～808

幅20～40cm、深さ10～30cm、N-79～84°-Wを測る。807のみN-81°-Eとなっている。切りあいから806より古い。SD06、807から須恵器、土師器片が出土している。

土坑状遺構

調査区の中央部(5区～7区)に8基を確認している。大きさは100cm以上のものが多く、覆土が比較的しっかり残っているものと、浅いものがあった。以下にこの遺構について記述していく。現地調査時に遺構№をグリッド番号+枝番号の3桁としていたので、ここでもそのまま使用していく。

SK501 B5区 長径120cm、短径80cm 深さ45cm。遺構上面に溝状遺構が錯綜しており、覆土の途中に青灰色砂が混入していたため、全景を捉えきれなかった。青灰色砂の下から、19点に及ぶ土器が一括して確認された。

SK502 B5区 長径170cm、短径150cm、深さ30cm。土鍾と自然木が1点づつ出土している。

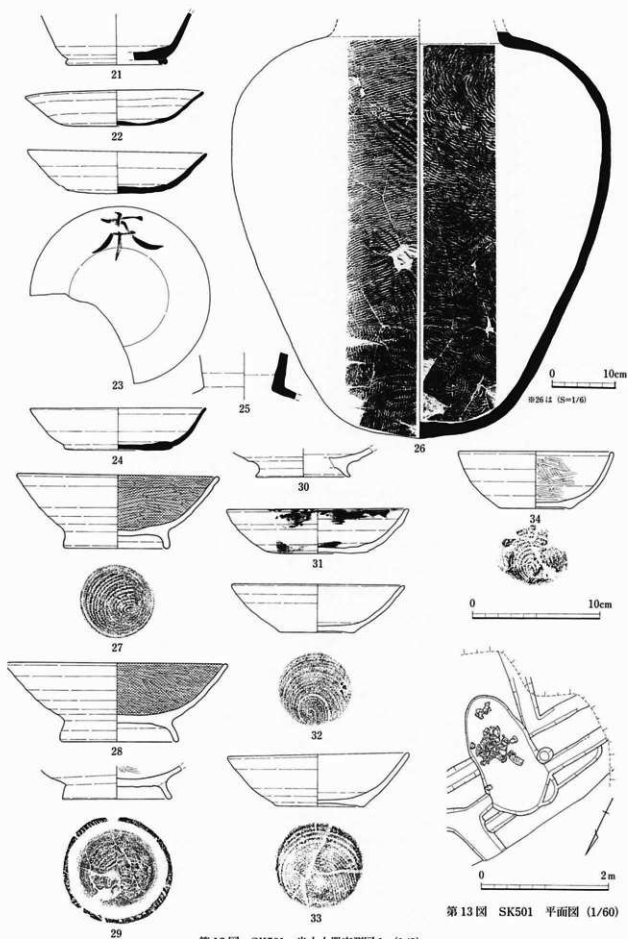
SK503 B5区 径100cm、深さ10cm。遺構上面に溝状遺構が錯綜しており、全景が掴みづかった。土師器片が1点出土している。

SK504 B5区 径120cm、深さ20cm。覆土はしっかりと残っていたが、実測可能な出土遺物はない。遺構南側には拳～人頭大の礫が混入している。

SK601 B6区 径140cm、深さ45cm。覆土中から3点の木製品が出土した。

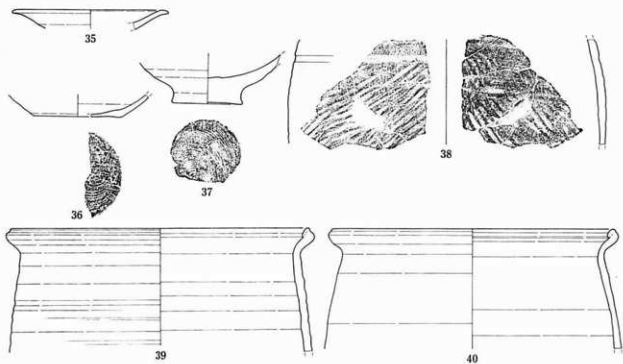
SK701 B7区 長径120cm、短径100cm、深さ10cm。遺構覆土に炭化物を多く含む。浅い皿状を呈している。土器2点を実測している。

SK702 A7区 実測可能な部分の径80cm、深さ60cm。北側壁面下で検出した。遺構覆土中から、珠洲焼甕片が3点出土している。

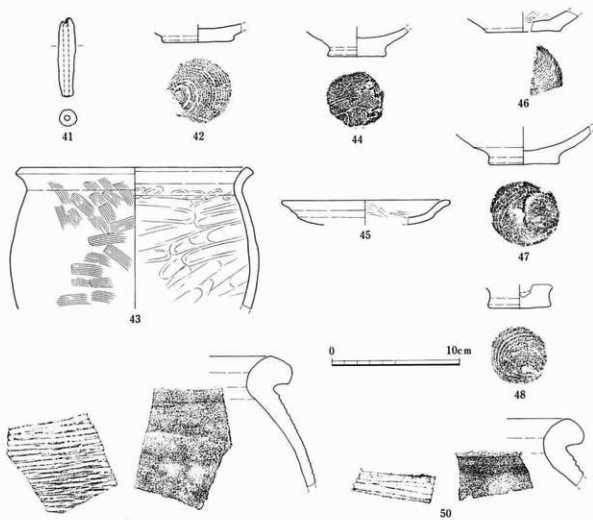


第12图 SK501 出土土器実測图1 (1/3)

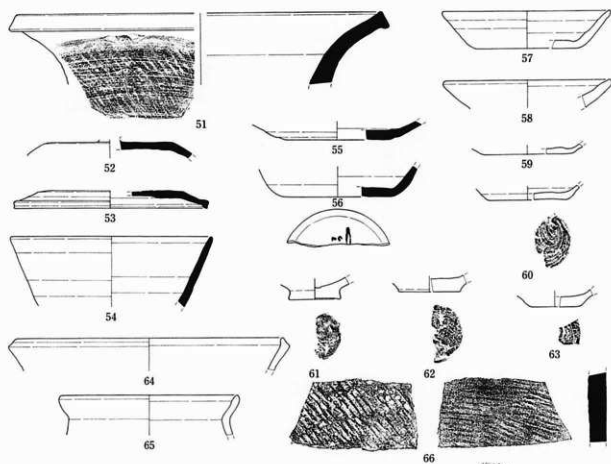
第13图 SK501 平面图 (1/60)



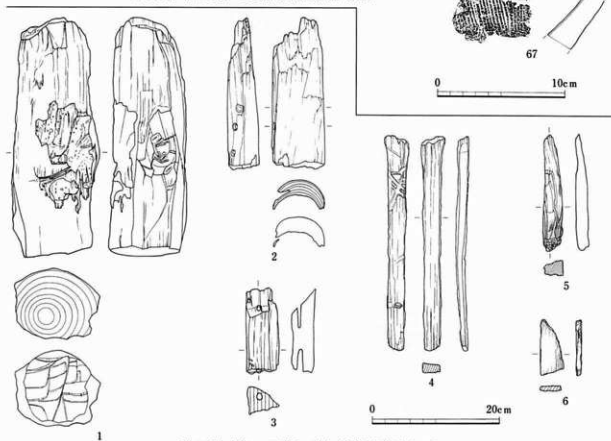
第14図 SK501 出土土器実測図2 (1/3)



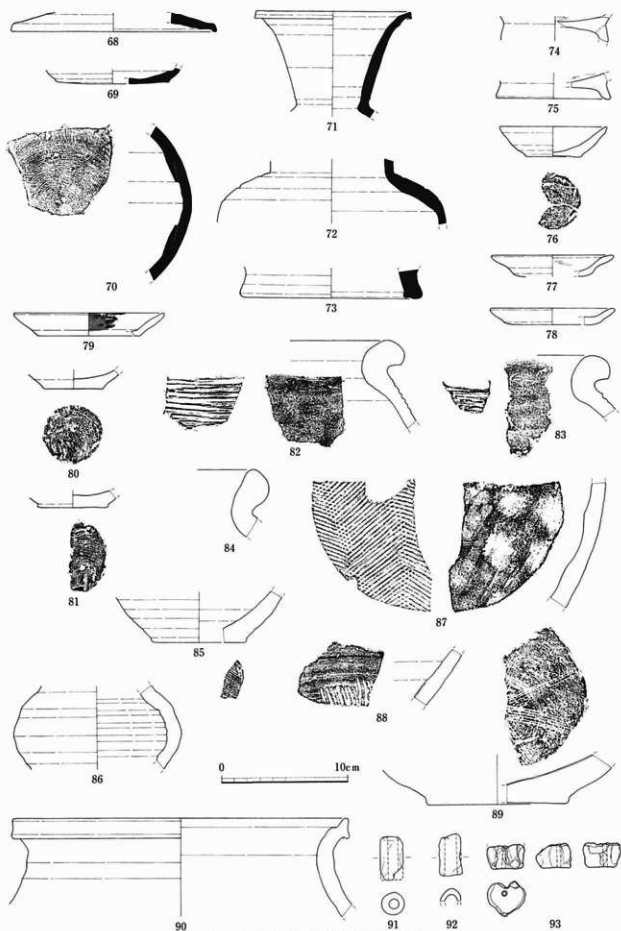
第15図 第Ⅱ地区 その他土坑出土土器実測図 (1/3)



第16图 第II地区 SD出土土器实测图 (1/3)



第17图 第I·II地区 出土木制品实测图 (1/6)



第18图 第Ⅱ地区 出土文物实测图 (1/3)

小 穴

実測可能な遺物を伴う小穴は確認できなかった。径10～20cm程度のものが多く、ほぼ単層の覆土である。1～3区で確認された径の小さな一群は、南北方向の溝に付くような並び方をしており、5cm未満の杭を伴うものが多い。近代の耕作に伴う遺構であると考えている。

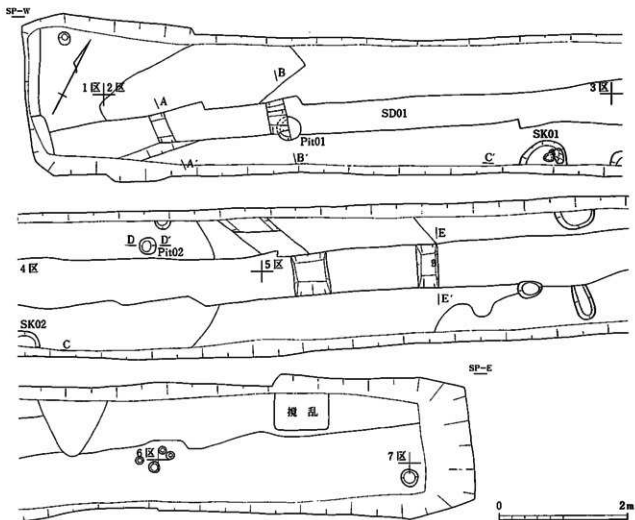
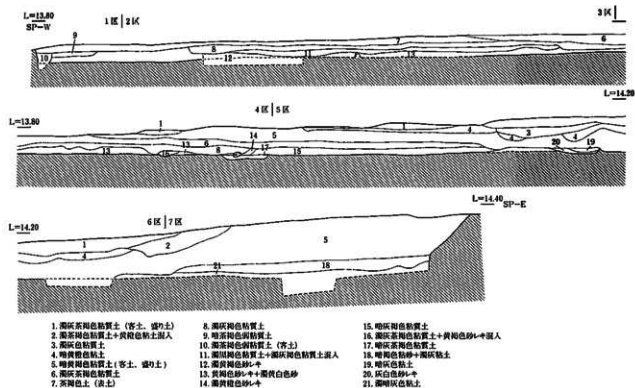
4～8区にかけては径20cm程度のものが多いが、並び方に規則性を見つけることはできなかった。

出土遺物

遺物の出土量はあまり多くなく、パンケース換算で5箱程度である。SK501を除き、遺構についたものは少なかったが、出来る限り実測をおこなった。図化資料は72点である。このうち20点がSK501からの出土である。SK501出土遺物についての内訳は須恵器6点、土師器14点となっており、№23の須恵器無台坏体部外面には墨書「本」が確認できる。また、有台の土師器碗は内面に黒色処理がなされ、内面にミガキのこる丁寧な調整がなされている。口径は15cm程度の大振りなものである。土師器の碗類については体部がややふくらみそのまま口縁部が収まるものが大部分であるが、№34のように口縁部が外側に開いたものや№40のように底部が延びたものも含まれている。このほかの土坑出土遺物を見ると、SK601からは底部に糸切痕の残る土師器碗類3点と板状の木製品3点が確認された。木製品№5は一部が炭化している。また、SK702からは珠洲焼の甕片が出土しており、口縁部の形態から13世紀代のものと考えられる。また、須恵器片はこの他の土坑からは出土しておらず、口縁端部が外側に開いた皿や、糸切痕の残る底部片のみである。SD出土遺物について見てみると、SD07、10、804、806から須恵器が出土しており、SD03では珠洲焼のすり鉢片が出土している。第Ⅱ地区全体について、これまでの市教委の調査で出土した土器の傾向と比較してみると、全体的に土師器の割合が高く、須恵器の出土が少ないという特徴がある。また、底部に糸切痕が残る土師器碗類の比率が高いように思われる。土師器、須恵器、珠洲焼の他に、加賀焼の甕口縁部片、土人形片、土鍾などが出土している。

第4節 第Ⅲ地区（四柳町れ62番地及び農道）

調査当時の標高は13.7m程度で、第Ⅱ地区より一段低い。第Ⅲ地区は田地東側端部にあたり水路として利用される部分（Ⅲ-1と呼称）と、その東側を走る農道で、簡易水道を埋設する部分（Ⅲ-2と呼称）と、その南側端部で、排水路が集約し、コンクリート製の溜槽を設置する部分（Ⅲ-3と呼称）とに大別される。グリッド割については第Ⅱ地区で使った南北方向のものを延長して実測等に使用した。基本的な層序については、Ⅲ-1区については現水田耕作面が20cm程度堆積し、その下に濁灰褐色粘土層が5cm程度薄く堆積している。田地端部ということもあり、耕作によりかなり攪乱された状態であった。その下がベース面であり、南から北に向かって緩やかに傾斜している。第Ⅱ地区で確認された溝と方向を同じくする溝が1条と小穴が9基検出された。Ⅲ-2地区及びⅢ-3地区については、調査対象面積が狭く、なおかつ農道部分そのものを通行止めにし、調査を行わなければならないため、その他の調査をほぼ終えてから集中して行った。Ⅲ-2区については農道を断ち割ってみると、



第19图 第三-1地区 土層図, 平面図 (1/60)

古い簡易水道が入れられており、現地表面70cm ほどは客土が入れられていた。その下に10cm ほどの黒褐色粘土層が確認でき、この層から古代の遺物が出土している。この層を掘削したところ、北東側に落ち込んでいっていることが確認できたが、自然地形によるものか、溝状の遺構となるのかは、調査区域外になってしまったため、確認できなかった。Ⅲ-3地区についても古い簡易水道管が敷設されており、遺構・遺物は確認できなかった。また、調査の必要な深さまでには、Ⅲ-2地区で確認された黒褐色粘土層は確認できなかった。

Ⅲ-1地区

- SD01** 幅40cm、深さ30cm、N-30°-Eを測る。現在の田んぼ区割りとは若干ずれた角度で掘削されている。溝の平面形状から、重機による掘削である可能性がある。
- SK 類** 長径50cm程度の土坑を2基検出した。時期を特定できる遺物の出土はない。
- 小穴** 径10~20cm程度の小穴を9基検出した。遺構覆土はおおむね単層であり、濁灰褐色粘土であった。時期の特定できる資料はない。

出土遺物

遺構から出土した遺物はなく、おおむね遺構検出面からの出土である。4点を図化した。すべて須恵器であり、Na18の無台坏裏面には墨痕が確認できる。8世紀以降のものであると思われる。

Ⅲ-2地区

溝状遺構

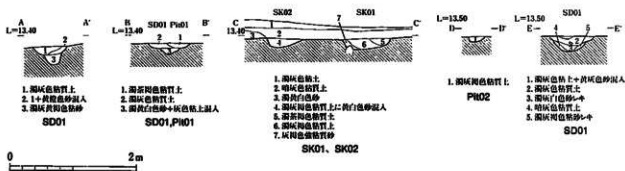
調査区が狭いうえ、湧き水が著しく、厳密には遺構であるかどうかの確認もできなかった。黒褐色粘土層が調査区域外の北側にむかって落ち込んでいっていることが確認されたので、ここでは溝状遺構としてとらえておく。落ち込みは緩やかである。

出土遺物

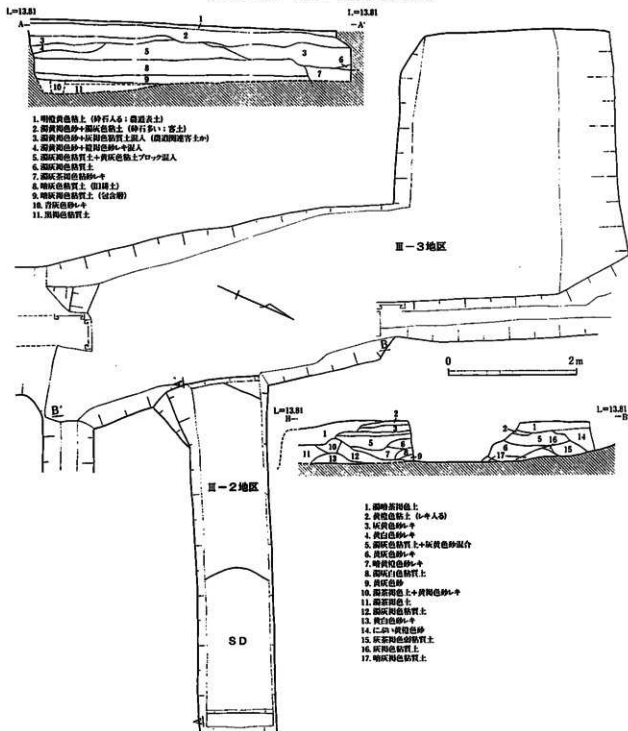
溝状遺構の覆土とその上層の淡黒褐色粘土層との区別が難しく、一括しての取り上げとなった。3点を図化している。すべて須恵器の無台坏である。全形の分かる資料はないが、底部から体部への立ち上がりが鋭角的な8世紀以降の遺物であり、この層の時代も同期のものであると考えている。

Ⅲ-3地区

ほ場整備事業により掘削が及ぶ深さまでについて、調査区域内において、確認できた遺構はない。調査区の南北方向及び東西方向に簡易水道管が敷設されており、その工事や農道の建設に伴う土砂や碎石が入っていた。土師器の碎片が出土したが、実測可能な出土遺物もない。ただし、Ⅲ-2地区で検出したように、この下には古代の包含層が残っていると考えられる。



第20图 第Ⅲ-1地区 遺構断面図 (1/60)



第21图 第Ⅲ-2, 3地区 土層図, 平面図 (1/60)

第4章 まとめ

今回の調査区は羽咋市教委が平成元年に発掘調査を実施した場所から約80～150m西方に位置し、現在の石川県埋蔵文化財センターが平成10年度に発掘調査を実施したH地区から30～100m程西に位置している。市教委が平成元年と2年に実施した第1次、第2次調査では、狭い面積の調査でありながら、古代の官衙に関すると思われる遺構、遺物が確認されている。また、鹿島バイパスの調査を県が実施した折には、縄文から近代までの複合遺跡で、古代の水田跡などが確認されている。今回の調査区は山地からさらに下った場所で、調査時の標高が10～15mとこれまでより一段低い場所である。地形的にも以前の調査区より傾斜がさらに進んだ場所であった可能性が考えられる。今回の調査では、古代から中世・近代にいたる遺構・遺物を確認したが、これまでの調査成果と比較してみると、第1次調査に見られたような建物群などは確認できなかったが、第1地区においては建物もしくは柵列となる可能性のある小穴が確認された。柱根の残る Pit11 や、2段に掘られた Pit59 などの周辺の一帯である。第2地区においては、中世以降の溝群、土坑と古代の溝群、土坑が確認できた。市教委の第3次調査（平成4）においても、古代と中世の溝および掘立柱建物跡が確認されているが、溝の方向が一致しているものもあり、興味深い。また、第2地区については、第1地区に比べ確認できた小穴の数が少なく、その分溝が調査区域全体に縦横に走っている。第1地区において、建物の可能性のある小穴列が確認されたのに対し、第2地区については少なくとも、中世以降については居住域としての土地利用よりは耕作域としての利用が想定される。県が実施した大規模な発掘調査の成果と合わせて、検討課題としていきたい。

各地区ともに、出土遺物は多くなく、遺構に伴うものも多くなかったため、各遺構の時期を特定するのが困難であるが、出土遺物の時期が9世紀以降のものが多く、遺構の時期もそれをさかのぼるものではないと認識している。その中で、第2地区におけるSK501とSK702はそれぞれ、時期の特定できる遺物がまわって出土している。耕地整理による地面の掘削と盛り土により、この2つに代表される9世紀代の遺構と13世紀代の遺構がほぼ同じ面で検出され、さらにSD05のように竹を埋設した暗渠も同じ面で検出されているような状況となったものと考えられる。

今回の調査区については、全体的に居住域としてのみの利用は想定しにくい状態であったが、第2地区、第3地区において少数ながら墨書土器が出土していることから、古代においては今回の調査区周辺に居住域が存在していた可能性は高いと思われる。

現地調査は、ほ場整備事業と平行して進められ、周辺では重機が作業していた。今回の調査においては、駐車スペースや掘削作業など多方面にわたり、整備事業担当の小倉建設にお世話になった。

遺構、遺物ともに概要を述べるだけにとどまってしまう、不十分な報告となってしまった。筆者の力不足から、十分な考察を行うことができず、概要報告程度のものとなってしまったことをおわびしつつ、お世話になった方々には、記して謝意にかえさせていただきます。

参考文献

- 『四柳白山下遺跡Ⅰ』 1999 羽咋市教育委員会
- 『四柳白山下遺跡Ⅱ』 1997 羽咋市教育委員会
- 『四柳白山下遺跡Ⅲ』 1997 羽咋市教育委員会
- 『四柳白山下遺跡Ⅰ・Ⅱ』 2000 (財)石川県埋蔵文化財センター

第2表 四柳白山下遺跡出土土器観察表1

調査番号	器種	器形	成形・調整(内面/外面)	胎土			残存 (1/24)	計測値			出土地点	文様・記号・その他 特記事項
				海綿	砂粒	断面		口径 (A)	底径 (D)	器高 (H)		
1	須恵器	無台坪	ナデ/ナデ	0	M5	Ⅱ	—/6	8.0			I C3区 SK39	底部外面へラ記号
2	須恵器	鉢?	ナデ/ナデ	0	S3	Ⅲ	3/—	27.8			I B4区 SD01	
3	土師器	皿	ナデ/ナデ	1	M3	—	2/—	(11.0)	(7.0)	(1.2)	I B4区 SK41	
4	土師器	皿	ナデ/ナデ	0	S3	—		13.4			I A3区 Pit20	
5	須恵器	甕	ナデ/ナデ	0	S4	Ⅲ	3/—	53.4			I B5区 Pit51	
6	須恵器	蓋	ナデ/ナデ	0	M4	Ⅲ	3/—	13.0			I 地区	
7	須恵器	有台坪	ナデ/ナデ	0	L3	Ⅲ	4/—	17.0			I 地区	
8	須恵器	有台坪	ナデ/ナデ	0	L2	Ⅲ	—/24	10.4			I 地区	高台部径:9.4、高台部高:0.8
9	須恵器	無台坪	ナデ/ナデ	0	M1	Ⅲ	—/12	8.2			I 地区	
10	須恵器	壺	タタキ→ナデ/タタキ→ナデ	1	L3	0	3/—	16.0			I 地区	肩部径:14.2、肩部高:4.3
11	土師器	無台坪	ナデ/ナデ	2	S4	—	—/16	12.0	5.6	3.8	I 地区	底部:未切痕
12	土師器	皿	ナデ/ナデ	0	S3	—	4/—	13.0			I 地区	
13	土師器	甕	強いナデ/タタキ	0	L3	—	—/8	5.2			I 地区	
14	須恵器	有台坪	ナデ/ナデ	0	M3	Ⅲ	—/4	8.4			Ⅱ-2	高台部径:7.4、高台部高:0.5
15	須恵器	無台坪	ナデ/ナデ	0	M2	0	—/6	9.0			Ⅲ-2地区 落ち込み	
16	須恵器	無台坪	ナデ/ナデ	0	S4	Ⅲ	—/3	11.8			Ⅲ-2	
17	須恵器	蓋	ナデ/ナデ	0	L5	I	12/—	16.6			Ⅲ-1	
18	須恵器	無台坪	ナデ/ナデ	0	L3	Ⅲ	—/6	6.2			Ⅲ-1	底部外面:湯書有
19	須恵器	小型壺	ナデ/ナデ	0	M3	Ⅲ	3/—	8.6			Ⅲ-1	肩部径:8.0、肩部高:1.9
20	須恵器	甕	ナデ/ナデ	0	S1	I					Ⅲ-1	肩部に凸部有 双耳瓶の可能性有
21	須恵器	有台坪	ナデ/ナデ	0	S3	Ⅲ	—/6	8.0			Ⅱ A5区 SK501	P-8
22	須恵器	無台坪	ナデ/ナデ	1	M4	Ⅲ	24/24	14.1	7.3	2.9	Ⅱ A5区 SK501	P-6
23	須恵器	無台坪	ナデ/ナデ	0	M3	0	18/18	15.0	7.7	3.7	Ⅱ A5区 SK501	湯内「本」 P-3
24	須恵器	無台坪	ナデ/ナデ	0	M3	0	16/16	13.8	8.4	3.4	Ⅱ A5区 SK501	P-1
25	須恵器	壺形部	ナデ/ナデ	0	M4	Ⅲ	—				Ⅱ A5区 SK501	肩部径:3.7 P-2
26	須恵器	甕	タタキ/タタキ	0	S3	Ⅲ	—				Ⅱ A5区 SK501	胴部最大径:8.0、胴部高:63.8
27	土師器	有台坪	ミナキ/ナデ	0	M3	—	21/24	16.0	8.3	5.9	Ⅱ A5区 SK501	内面黒色、底部:未切痕 P-11
28	土師器	有台坪	ミナキ/ナデ	0	M3	—	18/24	17.5	9.4	6.3	Ⅱ A5区 SK501	内面黒色 P-5
29	土師器	有台坪	ミナキ/ナデ	0	M2	—	—/24	8.6			Ⅱ A5区 SK501	底部:未切痕
30	土師器	有台坪	ナデ/ナデ	0	M3	—	—/1	9.0			Ⅱ A5区 SK501	高台部径:7.4、高台部高:1.0 P-10

第3表 四柳白山下遺跡出土土器観察表2

検出番号	器 種	器 形	成形・調整	胎 土			残存 (/24)	計 測 値			出土地点 道 橋	文様・記号・その他 特 記 事 項
				海綿	砂粒	断面		口径 (A)	底径 (D)	器高 (H)		
31	土師器	無台杯	ナデ/ケズリナデ	1	M4	—	18/24	14.5	7.9	3.5	Ⅱ A5区 SK501	内外面炭化物付着 P-7
32	土師器	無台杯	ナデ/ケズリナデ	0	M4	—	6/24	13.6	6.0	3.8	Ⅱ A5区 SK501	底部:糸切痕 P-6
33	土師器	無台碗	ナデ/ナデ	0	M4	—	16/24	14.6	7.0	4.3	Ⅱ A5区 SK501	底部:糸切痕 P-10
34	土師器	無台碗	ミガキ/ケズリナデ	0	M4	—	3/16	12.0	5.4	4.5	Ⅱ A5区 SK501	底部:糸切痕
35	土師器	皿	ナデ/ナデ	0	M3	—	2/—	12.4			Ⅱ A5区 SK501	P-10
36	土師器	無台碗	ナデ/ナデ	0	M3	—	—/6		7.0		Ⅱ A5区 SK501	底部:糸切痕 P-6
37	土師器	碗	ナデ/ナデ	0	S3	—	—/24		5.6		Ⅱ A5区 SK501	柱状高台, 底部:糸切 P-2
38	土師器	甕	タタキ→ナデ/タタキ	0	M3	—					Ⅱ A5区 SK501	
39	土師器	長胴壺	ナデ/ナデ	0	M5	—	1/—	23.6			Ⅱ A5区 SK501	内外面炭化物付着 P-9
40	土師器	長胴壺	ナデ/ナデ	0	M4	—	3	22.2			Ⅱ A5区 SK501	内外面炭化物付着 P-9
41	土師器	土埴		0	S3	—					Ⅱ A5区 SK502	長さ6.2, 径1.4 重量:10.6g
42	土師器	碗	ナデ/ナデ	1	M2	—	—/24		5.4		Ⅱ B4区 SK503	底部:糸切痕
43	土師器	甕	胎圧痕, ナデ/ハケ	1	M5	—	6/—	18.0			Ⅱ A7区 SK701	肩部径:17.0, 肩部高:1.8 内外面炭化物付着 P-4
44	土師器	碗	ナデ/ナデ	0	S5	—	—/24		4.4		Ⅱ A7区 SK701	底部:糸切痕 P-1
45	土師器	皿	ミガキ/ナデ	0	S4	—	2/—	13.0			Ⅱ A6区 SK601	
46	土師器	皿	ミガキ/ナデ	0	S3	—	—/6		5.8		Ⅱ A6区 SK601	底部:糸切痕
47	土師器	碗	ナデ/ナデ	4	S3	—	—/24		5.5		Ⅱ A6区 SK601	底部:糸切痕
48	土師器	碗	—/ナデ	3	M3	—	—/24		4.7		Ⅱ A6区 SK601	底部:糸切痕
49	珠洲焼	甕	ナデ/並行タタキ					—			Ⅱ A7区 SK702	
50	珠洲焼	甕	ナデ/並行タタキ					—			Ⅱ A7区 SK702	
51	須恵器	甕	ナデ/タタキ→ナデ	0	S5	Ⅱ	2/—				Ⅱ B4区 SD10	
52	須恵器	蓋	ナデ/ナデ	1	M5	Ⅲ					Ⅱ B4区 SD10	
53	須恵器	蓋	ナデ/ナデ・ケズリ	2	M2	Ⅲ	3/—	15.4			Ⅱ B8区 SD806	
54	須恵器	坏か	ナデ/ナデ	0	L3	Ⅲ	6/—	16.0			Ⅱ B8区 SD806	
55	須恵器	無台杯	ナデ/ナデ	0	M3	Ⅲ			9.2		Ⅱ A4区 SD07-2	
56	須恵器	無台杯	ナデ/ナデ	0	M4	Ⅲ	—/8		8.8		Ⅱ A3区 SD05	底部:崩潰
57	土師器	無台杯	ナデ/ナデ	0	S3	—	3/3	13.0	8.0	3.0	Ⅱ C4区 SD15	
58	土師器	皿	ナデ/ナデ	0	M3	—	2/—	12.8			Ⅱ B7区 SD702	
59	土師器	皿	ナデ/ナデ	0	S3	—			6.8		Ⅱ B2区 SD04	
60	土師器	皿	ナデ/ナデ	1	S5	—	—/6		6.0		Ⅱ B8区 SD803	底部:糸切痕

第4表 四柳白山下遺跡出土土器観察表3

調査番号	器種	器形	成形・調整	胎土			残存 (24)	計測値			出土地点 遺構	文庫・記号・その他 特記事項
				海綿	砂粒	断面		口径 (A)	底径 (D)	器高 (H)		
61	土師器	碗	ナデ、ナデ	0	M4	—	— 12		4.2		Ⅱ B6区 SD701	
62	土師器	皿	ナデ、ナデ	0	S3	—	— 12		4.8		Ⅱ B8区 SD802	底部糸切痕
63	土師器	碗	ナデ、ナデ	0	S4	—	3 —		3.8		Ⅱ B8区 SD807	底部糸切痕
64	土師器	長胴壺	ナデ、ナデ	0	S4	—	2 —	22.2			Ⅱ B8区 SD806	
65	土師器	甕	ナデ、ナデ	0	M4	—	2 —	14.0			Ⅱ B8区 SD806	肩部径12.8、肩部高1.9
66	須恵器	甕	並行タタキ、並行タタキ	0	M4	Ⅲ					Ⅱ B8区 SD804	
67	珠洲焼	すり鉢									Ⅱ B2区 SD03	おろし目単位8～9
68	須恵器	蓋	ナデ、ナデ	0	M2	Ⅲ	3 —	16.2			Ⅱ B1区	
69	須恵器	無白環	ナデ、ナデ	2	M2	Ⅲ	— 6		8.8		Ⅱ B2区	
70	須恵器	横瓶	ナデ、カキメ	0	L3	Ⅲ					Ⅱ A4区	内面・接合痕
71	須恵器	瓶	ナデ、ナデ	0	L3	Ⅲ	6 —	12.4			Ⅱ B6区	肩部径5.8、肩部高7.4
72	須恵器	甕	ナデ、ナデ	0	M5	Ⅲ	—				Ⅱ 地区	
73	須恵器	高台部	ナデ、ナデ	0	L3	Ⅲ	— 4				Ⅱ 地区	高台部径14.0、高台部高2.
74	土師器	有白環	ミガキ、ナデ	0	M5	—	— 6		8.9		Ⅱ 地区	
75	土師器	有白環	ミガキ、ナデ	0	M4	—	— 4		9.0		Ⅱ 地区	高台部1.2
76	土師器	碗	ナデ、ナデ	0	S4	—	9/16	8.4	4.3	2.4	Ⅱ 5-6区	底部糸切痕
77	土師器	皿	ナデ、ナデ	0	S2	—	2 —	9.4	6.0	1.8	Ⅱ 地区	
78	土師器	皿	ナデ、ナデ	1	S3	—	3 —	9.6	7.4	1.3	Ⅱ 3-5区	
79	土師器	皿	ナデ、ナデ	0	S2	—	2 —	11.7	8.1	1.9	Ⅱ B1区	内面・炭化物付着
80	土師器	無白環	ナデ、ナデ	0	S4	—	— 24		4.8		Ⅱ 地区	底部糸切痕
81	土師器	無白環	ナデ、ナデ	0	S5	—	— 12		5.6		Ⅱ 地区	底部糸切痕
82	珠洲焼	甕	ナデ、あて貝、タタキ				—				Ⅱ 北側斜面	
83	珠洲焼	甕	ナデ、あて貝、タタキ				—				Ⅱ 5-6区	口縁部片
84	珠洲焼	甕	ナデ、あて貝、タタキ				—				Ⅱ 5-6区	
85	珠洲焼	壺か	ナデ、ナデ				— 3		7.2		Ⅱ 5-6区	底部・静止糸切痕
86	珠洲焼	壺	ナデ、ナデ				—				Ⅱ 地区	体部片
87	珠洲焼	壺か	ナデ、あて貝、タタキ				—				Ⅱ 地区	体部片
88	珠洲焼	すり鉢	ナデ、ナデ				—				Ⅱ 6-7区	おろし目単位9
89	珠洲焼	すり鉢	ナデ、ナデ				— 8		11.0		Ⅱ 6-7区	おろし目単位6～7
90	加賀焼	甕	ナデ、ナデ				3 —	26.4			Ⅱ 地区	

第5表 四柳白山下遺跡出土土器観察表 4

検出番号	器 種	器 形	成形・調整	胎 土			残存 (%)	計 測 値			出土地点 遺 構	文様・記号・その他 特 記 事 項
				海綿	砂粒	断面		口径 (A)	底径 (D)	器高 (H)		
91	土製品	土罎		0	M3	—					Ⅱ 3-5区	長さ3.5、径1.8、孔径0.8 重量7.6g
92	土製品	土罎		0	M3	—					Ⅱ 地区	長さ3.3、径1.8、孔径1.0 重量4.9g
93	土製品	土人形		0							Ⅱ A5区	残存部:高さ2.0、幅2.8 奥行3.0

第6表 四柳白山下遺跡出土木製品観察表 1

検出番号	出土地点 遺構番号	器 種	法 尺			特 記 事 項
			長さ	幅	厚さ	
1	I B2区 Pit11	丸太	37.8	11.0	10.8	
2	I B5区 Pit58	柱状	23.9	8.5	2.4	
3	I B11区 Pit03	角材	13.8	5.3	4.2	
4	Ⅱ B6区 SK601	板材	36.0	3.8	1.8	
5	Ⅱ A6区 SK601	角材	18.6	3.1	2.5	一部炭化
6	Ⅱ A6区 SK601	板材	8.9	3.7	0.9	

観察表中、〔成形・調整〕については、各部位内面／外面の順に記入した。同一の面において異なる調整が観察される場合、順番の分かる場合は一印で表記している。

〔胎土〕は、海綿骨片、石英・長石等岩石粒の大きさ、含有量を裸眼及び10×のルーペで観察した。その内、長石・石英・岩石粒はほとんどの土器が共通の傾向を示していたので、表中では砂粒として表記した。量は主観的に見て、通有量と思われるものを判断基準に3とし、以下5：非常に多い、4：多い、2：少ない、1：非常に少ないと表記した。また、大きさは0.5～2.0mmをM、それ以上をL、それ以下をSとし、特に目立つサイズについてのみ表記した。断面とは須恵器のみに行ったもので、酸化焙焼によって生成した茶褐色系の色層を「酸化層」、焙焼によって生成した青灰色系の色層を「還元層」とし、内外表面から内部まで完全な酸化層をⅠ類、内外表面のみ還元層で、内部は全面的に酸化層が残るものをⅡ類、還元層が内外表面からある程度内部まで及んでいるが、芯にはまだ酸化層が残るものをⅢ類、内外表面から芯まで完全に還元層芯まで完全に還元層のものをⅣ類、その他変則的な色層をなすものをⅤ類として、分類表記した。

〔残存量〕については口縁部／底部の残存率を24分割法で表示した。

〔計測値〕については、口径、底径、器高の3点について実測可能なものを表示した。

〔出土地点・遺構〕については、調査地区（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）、グリッド名、遺構番号について表記した。

〔記号・その他、特記事項〕については、土器の計測値の内、前項以外に計測可能なもの、墨書、ヘラ記号などを表記した。

四柳白山下遺跡 写真図版

図版 1～2	第Ⅰ地区写真図版
図版 3～6	第Ⅱ地区写真図版
図版 7～8	第Ⅲ地区写真図版
図版 9～12	出土遺物写真図版



1. 第1地区全景 (北より)



2. 第1地区 遺構検出状況 (南東より)



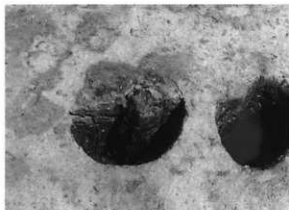
3. 1, 2区遺構検出状況 (北東より)



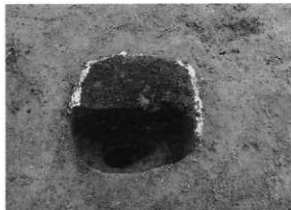
4. 3, 4区 遺構検出状況 (北東より)



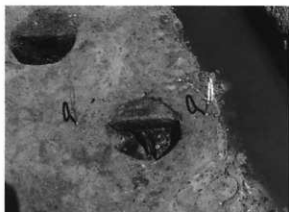
5. 5, 6区 遺構検出状況 (北より)



1. Pit 11 半載 (西より)



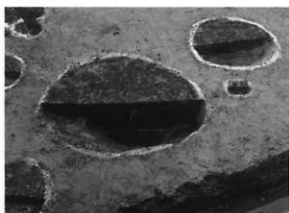
2. Pit 59 半載 (西より)



3. Pit 03 半載 (西より)



4. Pit 03 完掘 (北より)



5. SK 19 半載 (西より)



6. SK 39 完掘 (南西より)



7. 第1地区 完掘状況 (南東より)



8. 第1地区 完掘状況 (北西より)



1. 表土除去作業 (南東より)



2. 遺構検出状況 (南東より)



3. 2, 3区遺構検出状況 (南西より)



4. 4, 5区遺構検出状況 (西より)



5. 7, 8区遺構検出状況 (北西より)



6. 6, 7区遺構検出状況 (北東より)



7. SK 701検出状況 (北東より)



8. 5~7区土坑群検出状況 (北より)



1. 1, 2区東壁面断面 (南西より)



2. 3, 4区東壁面断面 (南西より)



3. 3, 4区東壁面断面 (南西より)



4. 5, 6区東壁面断面 (南西より)



5. 6, 7区東壁面断面 (南西より)



6. 7, 8区東壁面断面 (南西より)



7. 1区サブトレンチ断面 (南西より)



8. 4区サブトレンチ断面 (南西より)



1. SK 501 遺物出土状況 (南より)



2. SK 502 半載状況 (西より)



3. SK 502 断面 (西より)



4. SK 502 半載状況 (西より)



5. SK 501、502 完掘状況 (北東より)



6. SK 504 半載状況 (南西より)



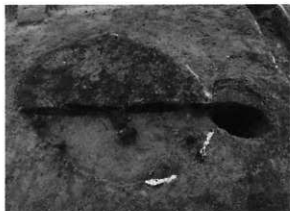
7. SK 504 完掘状況 (北東より)



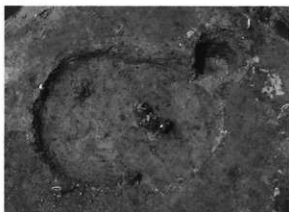
8. 5～7区完掘 (南より)



1. SK 601断面 (北より)



2. SK 701半截 (南東より)



3. SK 701完掘状況 (南東より)



4. SK 702半截断面 (南より)



5. SK 702遺物出土状況 (北東より)



6. SK 702・3断面 (南西より)



7. SK 702完掘状況 (北東より)



8. SK601, 701, 702完掘状況 (北東より)



1. 第Ⅱ地区全景 (南東より)



1. 1, 2区完掘状況 (北より)



3. 3～5区完掘状況 (北より)



4. 4～8区完掘状況 (南より)



5. 7, 8区完掘状況 (西より)



1. 第Ⅲ地区全景 (西より)



2. 第Ⅲ-1地区7区遺構検出状況と北壁断面(南東より)



3. 同5, 6区 (南東より)



4. 同4, 5区 (南東より)



5. 同1, 2区 (南東より)



1. Ⅲ-1地区遺構検出状況 (北東より)



2. Ⅲ-1地区完掘状況 (北より)



3. Ⅲ-1地区SD01断面 (南西より)



4. 同地区SK01,02 (左) 断面 (北より)



5. Ⅲ-2地区平面 (北より)



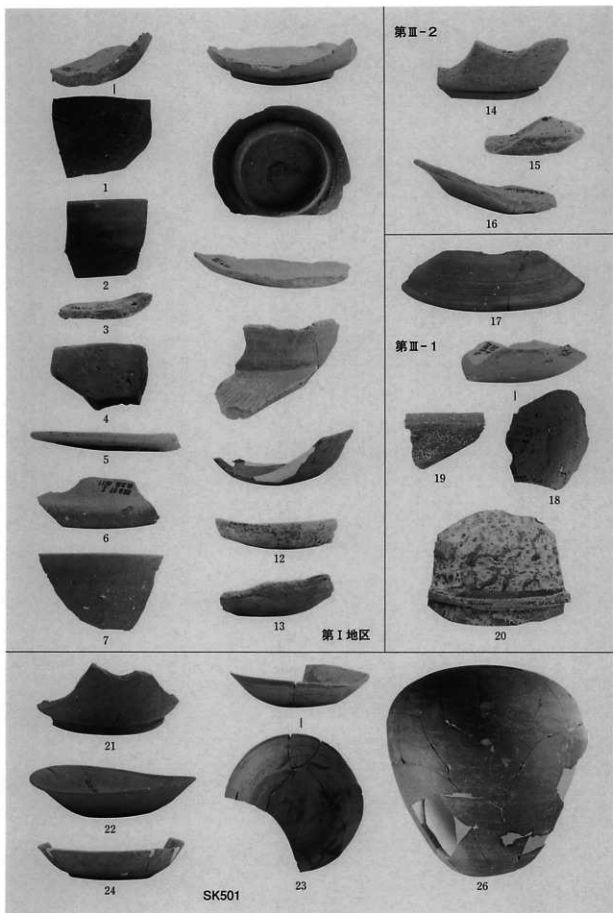
6. Ⅲ-2地区東壁断面 (北東より)



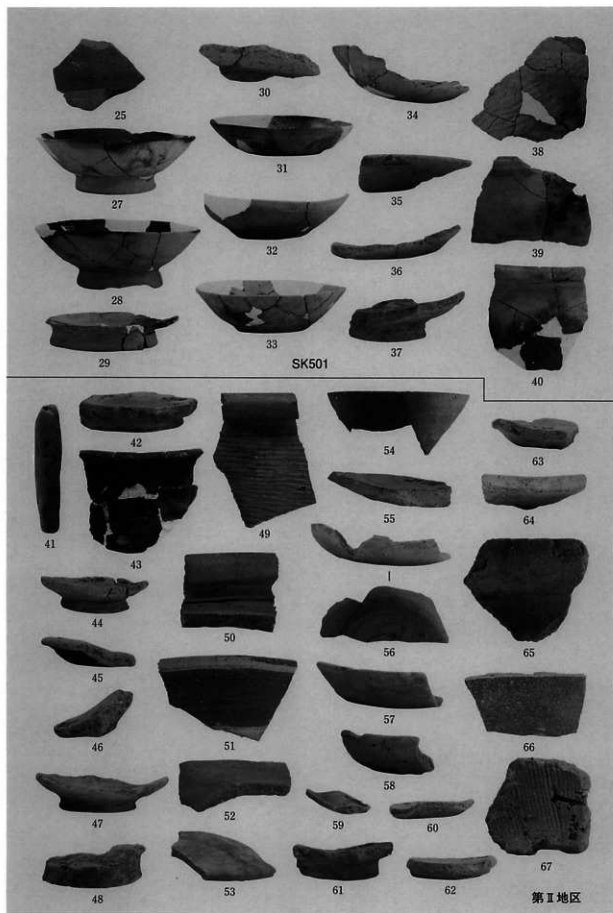
7. 第Ⅲ地区 全景 (西より)



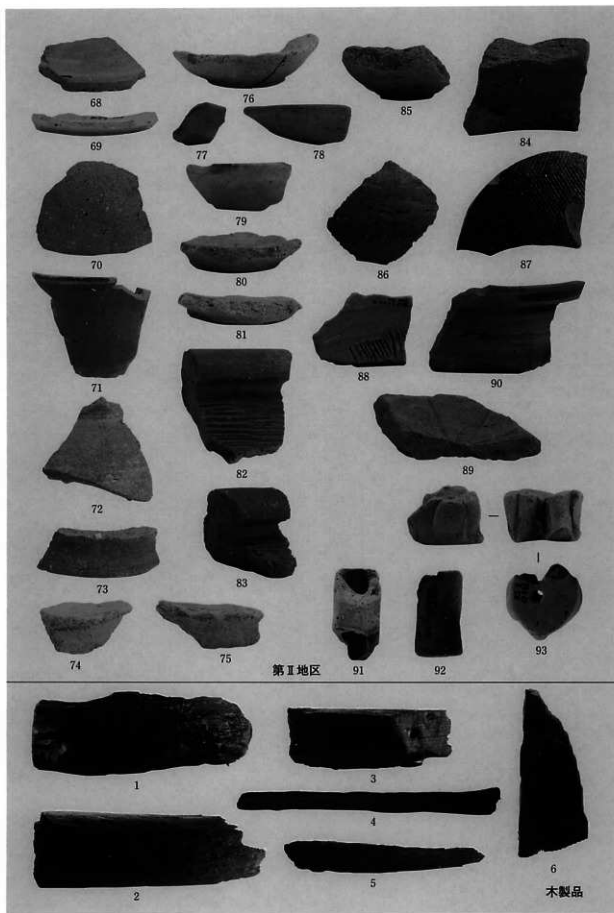
8. 第Ⅲ地区全景 (南西より)



四柳白山下遺跡 出土遺物1



四柳白山下遺跡 出土遺物 2



四柳白山下遺跡 出土遺物3

報 告 書 抄 録

ふりがな	よつやなぎはくさんしたいせき							
書 名	四柳白山下遺跡							
副 書 名	県営ほ場整備事業(経営体育成型)四柳地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
編 著 者 名	牧山 直樹 宮下 栄二							
編 集 機 関	羽咋市教育委員会							
所 在 地	〒925-0027 石川県羽咋市鶴多町鶴多田38-1 in. 0767-22-5998							
発行年月日	西暦 2008年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北緯	東経	調 査 期 間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺 跡 番 号					
よつやなぎはくさんしたいせき 四柳白山下 遺跡	いしかわけん ほくかいし 石川県羽咋市 四 柳 町	17207	07117	36° 55' 49"	136° 51' 18"	平成19年5月7日～ 平成19年8月12日	470㎡	県営ほ場整備事業(経営体育成型) 四柳地区
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代		主 な 遺 構		主 な 遺 物	特 記 事 項	
四柳白山下 遺 跡	集 落 祭 祀	縄文時代～近世		小穴、土坑、 溝		土師器、須恵器、 木製品、土人形	北緯・東経は世界測地系を使用 している。	

四 柳 白 山 下 遺 跡 IV

平成20年3月31日 発行

編集・発行 石川県羽咋市教育委員会

〒925-0034 石川県羽咋市旭町ア-200番地

電話 (0767)22-7195

印 刷 (株)ハクイ印刷

